
R G S ~レトロゲームシスターズ~

沙φ亜竜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

R G S ｾﾚﾄﾛﾍﾞｰﾑｼｽﾀｰｽﾞ

【Nコード】

N 7 0 8 5 Y

【作者名】

沙φ亜竜

【あらすじ】

父親を亡くした3姉妹。その父親が遺してくれた形見は、膨大な数のレトロゲームだった。ゲームが大好きだった父親を思い返しながら、3姉妹はレトロゲームで遊び始めた。

小説……ではないです。レトロゲームをネタにした話です。こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、わかりませんが……。

第0話 こうして3姉妹はレトロゲームを始めた

【序章 カイコの独白】

お父さんが、死んだ――。

私たち3姉妹にとって、受け入れがたい現実。

大好きだったお父さん。

もう笑いかけてくれることはない。

もう怒ってくれることもない。

まだ幼かったミコは泣きじゃくっていた。

いや、小学生だったチヨコも私も、声を枯らして泣き続けたっけ。

でもお母さんだけは、私たちのそばで毅然とした態度を崩さなかった。

だけど私たちが寝入ったあと、声を押し殺して泣いていたのを、私は知っている――。

あれから数年――。

お母さんは私たちを養うため、必死に働いている。

お父さんはゲームが大好きだった。

その影響で、私たち3姉妹もゲームが大好きになった。

家計は苦しかったけど、お母さんは私たちがゲームするのを止めたりはしなかった。

お父さんが好きだったことを、お母さんも知っているから――。

ある日、お父さんの部屋にこっそり入った私たちは、見つけてしまった。

お父さんの遺した、宝の山のごとき、レトロゲームの数々を――。

【愛する娘たちの日常】

さて――。

俺の愛する娘たちは、今どうしているかな。

もう俺が死んでから何年も経ってしまった。

俺のことなんて、すっかり忘れてしまっているかもしれない。

それならそれで構わない。すっぱり諦めて帰ることができるからな。

……いや、もちろん悲しいとは思うが。

だが、俺のことなんて忘れてしまったほうがいいのかもしれない。

娘たちには幸せになってほしいのだから。

懐かしの我が家が見えてきた。
少々怖い部分もあるが……。
のぞいてみることにしよう。

どれどれ……。

おつ。3人とも集まっているみたいだな。
おや？ あそこは俺の部屋のはずだが……。

……………。

そうか。俺の宝物だった古いゲームを見つけたのか。
もちろん一番の宝は娘である彼女たちだったわけだが。

薄汚れた古いゲーム。

俺が死んだあとも、隠したままになっていたんだな。
隠していたというよりも、古いから仕舞っておいただけだったが。

とはいえ、娘たちにとっては時代遅れのゴミでしかないだろう。
こんな汚いのが残ってた。捨ててしまおう。
そんな会話の果てに、ゴミ袋に投げ込まれてしまう運命が待っているに違いない。

しかし、俺が苦笑まじりで思い描いたような展開にはならなかった。

チヨコ「カイコ姉、これって……」

カイコ「ゲームねえ。しかも古いわ。さすがお父さん」

ミコ「姉様方、おふたりとも、目がキラキラ輝いてますね」

チヨコ「そういうミコこそ！ ほら、ヨダレ拭けよ！」

カイコ「ふふつ。私たち、ゲームが大好きだものねえ。お父さんの影響で」

ミコ「父様は神様です！」

チヨコ「出た！ ミコのオヤジ信仰！」

ミコ「なんですか、チヨコ姉様！ 悪いとも言っんですか！？」

チヨコ「べつに悪かねえけどよオ……」

カイコ「ふふつ。ミコはお父さんにべつたりだったものねえ。

まだ幼かったけど、ミコが『おとうちやま』って呼ぶ声、
今でもはつきりと耳に残ってるわ。

よちよち歩きで、まだ可愛かったのよねえ」

ミコ「ちょ……、カイコ姉様！ 赤ん坊の頃のことなんて、忘れて
ください！」

カイコ「いい思い出よぉ？ 忘れたらもったいないわ」

チヨコ「そうそう。ミコをからかう、いいネタになるしな！」

カイコ「ふふっ、そうね」

ミコ「姉様方、いぢわるです……」

チヨコ「まあ、それはともかく……。このゲームの山、すげえな！」

ミコ「ミコたちが今これを見つけたというのは、天国の父様のお導きかもしれません」

カイコ「そうねえ……。それじゃあ、これから1本1本、みんなで遊んでいきましょう！」

チヨコ「異議なし！」

ミコ「はい、カイコ姉様！」

……。

カイコ、チヨコ、ミコ……。

俺の知っている頃からすると、随分と大きくなった娘たち。

3人とも、俺のことを忘れてなどいなかった。
しかも、俺の遺したゲームの山を――時代遅れの化石染みたゲームの数々を、喜んで遊んでくれるというのか。

ありがとう……3人とも……。俺には、すでに流せなくなっているはずの涙が、心の奥底から込み上げてくるように感じられてならなかった。

せっかくだし、娘たちの様子をしばらくのあいだ観察してみることしよう。

今の俺には、時間はそれこそ無限にあるのだから――。

【人物紹介とルール解説】

> i 3 6 2 1 3 — 4 5 3 3 <

カイコ「というわけで、私が長女のカイコ、高校1年生よ」

ミコ「カ……カイコ姉様、誰に喋ってるんですか!？」

カイコ「ふふつ、細かいことを気にしちゃダメよ」

チヨコ「突然家の中で自己紹介なんて始めて、

頭おかしくなったかと思ったぜ……」（ぼそっ）

カイコ「あら、チヨコ。なにか言っただろ？」

チヨコ「い……いやっ、なんでもない！」

カイコ「あら、そう？ ふふふ……」

ミコ「カイコ姉様、笑顔なのに怖いです……」

カイコ「ふふつ。私はおしとやかでか弱い女の子よ。」

それはともかく。

私はロールプレイングゲームとアドベンチャーゲームが大好きなの。」

チヨコ「アドベンチャーっていうか、ノベルゲームだろ！ それもBLの！」

カイコ「ちょ……！？ そ……そういうのもやるっただけよ！」

美形男子が出てくるゲームなら全般的に好きだもの！」

チヨコ「どちらにしても、ダメダメじゃないか？ カイコ姉、リアルではサッパリだろ？」

カイコ「うぐっ……！」

で……でも、可愛い動物とかが出てくるゲームも好きだもの！」

> i 3 6 2 1 4 — 4 5 3 3 <

チヨコ「はいはい。今さらって感じだけどな。事實は事實なんだし。

……ま、紹介を続けるぞ？

オレは次女のチヨコ、中学2年。アクションゲームが大好きだ！

格闘ゲームやアクションパズル、レースにスポーツなんか
も得意分野だな！」

カイコ「つまり、暴れるのが好きなのよねえ」

チヨコ「誤解を招く言い方すんなよ！」

カイコ「ふふっ、それにね、この子、可愛い女の子が大好物なのよ
！」

チヨコ「うあっ、カイコ姉、なにを！？」

カイコ「事实は事実でしょ？」（ニヤリ）

チヨコ「くっ……、仕返してわけか……！ この悪女め！」

カイコ「ふふっ、チヨコほどじゃないわよぉ」

> i 3 6 2 1 5 — 4 5 3 3 <

ミコ「姉様方、ケンカはやめてください。お互いの暴露合戦なんて、
見苦しいですよ？」

カイコ「あら、そうよね。さすがミコはいい子ね」。

ってことで、この子が三女のミコ、小学校6年生よ」

チヨコ「っていうか、暴露合戦ってなんだよ、ミコ！」

ミコ「ひゃあ！ チヨコ姉様、ほったを引っ張らないでください
っ！」

カイコ「まあまあ、落ち着いて、チヨコ。」

ミコは、シミュレーションゲームや思考型のパズルゲームなんかを

好んでプレイする頭脳派なのよね」

ミコ「あとは、シューティングゲームなんかも好きですね。

昔ながらの弾幕系とか、そういったもの専門ですけど」

カイコ「そうね。FPSなんかだと、チヨコの分野になるかしらねえ」

チヨコ「こんな感じで、好きなジャンルが結構分かれてるってのが面白いよな！」

カイコ「ふふっ。

だからこそ、それぞれが好きなジャンルを担当するって形にできるのよね」

ミコ「ゲームは初見プレイのほうが楽しいでしょうから、

担当者はネットであらかじめ調べたりしてはいけないんですよね」

チヨコ「そうだな！ そのほうが面白くなりそうだし！」

カイコ「ええ。担当者は順番になるから、

次はどのタイトルにするかを他の2人で決めておく感じね」

チヨコ「担当者以外は、

ネットとかでいろいろ調べておいてOKってルールにする

んだよな！」

カイコ「ふふつ。そのほうが、いろいろとツッコミも入れられるしね。」

ミコ「……なんだかそのルールだと、

ミコだけ思いっきり姉様方にかかわれそうな予感があるんですが……」

チヨコ「気のせい気のせい！」

カイコ「そうよあ？」

ミコも普段のうつぶんを晴らしちゃえばいいのよ、チヨコが担当のときにね」

チヨコ「カイコ姉だって当然標的になるだろ!？」

カイコ「あら、ミコはそんな悪い子じゃないわよねえ？」 ねえく
くくくつ!？」（ずずいっ）

ミコ「うつ……。はい、カイコ姉様……」（ガタガタ）

チヨコ「笑顔でその凄み……。カイコ姉……やっぱ悪女だ……」

カイコ「なにか言った？」（にこにこ）

チヨコ「い……いや、べつに……」

カイコ「ふふつ。とりあえず、最初の担当者はチヨコに決定ね！

異論はないわよねえ？」（にこにこにこ）

チヨコ「う……、はい……」(がつくり)

ミコ「というわけで、最初の担当者はチヨコ姉様になりました」

カイコ「それでは、次回第1話、お楽しみに」

第0話 こうして3姉妹はレトロゲームを始めた（後書き）

こんな、小説とは言えない作品をお読みいただき、ありがとうございます。

レトロゲームをネタにした話を書いていく予定です。

題材にするゲームは、ファミコン、PCエンジン、メガドライブに限定するつもりです。

（CDROMROMとメガCDはOK）

もし扱ってほしいソフトなどがありましたら、感想ページやら作者宛てのメッセージやらでリクエストしてください。

でも、なんでもは扱えないわ。遊んだことのあるゲームだけ。（羽川翼風に）

第1話 スーパーマリオブラザーズ

カイコ「最初はやっぱりコレ。スーパーマリオよ〜！」

チヨコ「ベタだな！」

ミコ「ベタですね」

カイコ「ふふつ。でも、まずはこれをやっておかないとダメでしょ〜？」

ミコ「なるほど……。メジャーどころを最初にやっておけば、

マイナーなゲームを取り上げて大丈夫という考えですね」

チヨコ「マイナー………というと、『ホッターマンの地底探検』とかか!？」

カイコ「ちょ………！ それはちょっと、マイナーすぎ………」

チヨコ「だったら、『バードウィーク』とか!」

カイコ「そ………それかなりマイナーなんじゃないかしら………」

ミコ「ミコにはちんぷんかんぷんです」

カイコ「と………とにかく！ 今回はスーパーマリオなんだから！

他のゲームのことはいいの〜！」

チヨコ「はいはい。それじゃ、始めますかね〜」

チヨコ「カセットを差し込んで……電源オン！

このオモチャっばさがいいよな、ファミコンは！」

カイコ「ふふっ、そうね。……ほら、タイトル画面よ。さっさとスタートしなさいな」

チヨコ「急かすなよ！」

ミコ「頑張ってください、チヨコ姉様！」

チヨコ「フフン、オレの腕前をとくと見よ！ おっ、敵だ！」

カイコ「クリボーね」

ミコ「ジャンプして潰すんです、チヨコ姉様！」

チヨコ「それくらい知ってるぜ！ ジャーンプ！ ……おや？」

（SE）てれっててれってて

チヨコ「うおっ、いきなり死んだ！」

カイコ「ありがちね」

ミコ「カイコ姉、ダサイです」

チヨコ「うっさい！ くそ、ジャンプが弱すぎたってのもあるけど、

着地で避けようとしたのに、滑った感じだったぞ！？」

カイコ「ふふっ、少し滑る感じなのが、このゲームの特徴でもあるのよね」

チヨコ「『慣性』の法則ってやつか……。さすが、『完成』度の高いゲームは違うぜ！」

ミコ「ダジャレも滑ってますよ、チヨコ姉様」

チヨコ「うっさいっての！」

カイコ「気を取り直して、クリボーをやっつけちゃって！」

チヨコ「あいよ！ 今度こそっ！ えいっ！」

(SE) ペひよ！

チヨコ「よし、やった！ ……って、カイコ姉、どうした？」

ミコ「カイコ姉様、なにを身悶えてらっしゃるのですか？」

カイコ「この『ぺひよ』って音……！ 最高だわ！ はっん！

はあはあ……。早く、もう一度……」

チヨコ「……とっても変態な姉を持って、オレは恥ずかしいぜ……」

ミコ「大丈夫です。チヨコ姉様も、負けず劣らず変——」

ゲシッ！（無言でチヨップ）

ミコ「……やめてください、痛いじゃないですか。

それに、コントローラーを持ったまま暴れると、バグって止まりますよ？」

カイコ「ファミコンって、衝撃とかにかなり弱いものね」

チヨコ「フン！ オレだって静かにゲームしたいさ。

ま、先に進もう。『？』のブロックだな。確か、これを下から叩けば……」

ミコ「キノコが出てきましたよ、チヨコ姉様！」

チヨコ「わかってるよ。これを取って……よし、巨大化！」

カイコ「でも、どうしてキノコで巨大化するのかしら。

すごく怪しいキノコだね。副作用とか怖いわね」

ミコ「それに、どうして着ている服まで大きくなるのでしょうか？」

チヨコ「服が脱げたら18禁になるだろ！」

カイコ「……その理論だと、『魔界村』は18禁ってことに……」

チヨコ「揚げ足を取るな！……おつ、この土管って確か……。よし、入れた！」

ミコ「土管に入るんですか……」

カイコ「鈴木義司先生よじね」

チヨコ「いったいどこから、そういう知識を……。カイコ姉、年齢査証してないか？」

ドガッ！（無言で蹴り）

チヨコ「痛ててて……。オレが悪かった！許してくれ！」

ミコ「……ミコにはちんぷんかんぷんです」

チヨコ「2・1は地下ステージだな！」

カイコ「暗くて怖いわよね？」

チヨコ「フフン、オレにかかれば楽勝だぜ！フラワーゲット！

ファイアーボールで蹴散らすぜ！ 爽快爽快♪」

ミコ「どうして火の玉を撃てるのでしょうか？」

カイコ「……きつとあの花、激辛なのよ」

チヨコ「食べたってことかよ！」

ミコ「確かに食べられる花っていうのもありますが……」

チヨコ「マリオはどっかっていうと、花に食べられるほうだと思うぞ」

ミコ「パッケンフラワーですね。あれもどうして、土管から生えてくるのでしょうか？」

カイコ「細かいことを考えてたらキリがないわ」

チヨコ「そうだぜ！ 純粹に楽しめばいいのさ！ おっしや、大ジヤンプ！ うおっ！？」

ミコ「あの……天井の上に乗っちゃってしまいましたよ……？」

チヨコ「そうだな……どうしよう……。下に戻れないかな……？」

カイコ「ふふっ。そのまま進んじやいなさいな。そうすれば……」

チヨコ「お……おゝ、なんか、土管があつた！」

ミコ「土管の上に2、3、4って数字が書いてあります。

それぞれのステージへのワープですね」

チヨコ「とすると……。よしっ、3の土管へGO!」

ミコ「なぜ3なんです……?」

チヨコ「フッフッフ、まあ見てるって! 3-1スタート! そしてここで……」

ミコ「あっ、カメさんが……段差でマリオに踏み潰され続けてますよ!?」

チヨコ「これが必殺、100UPだ!」

カイコ「説明しよう!」

100UPとは、文字どおりマリオを100人以上に増やす技のことだ!」

チヨコ「そのまんまだな!

マリオって連続で敵を踏み潰すと得点がどんどん高くなっていくって、

最終的には1UPになるんだ。

そのあとずっと踏み続けられれば、永遠に1UPし続けられるって寸法さ!」

ミコ「すごいですね。ですが、マリオが100人……。どういう仕組みに——」

カイコ「細かいことは言いつこなしだって言っただでしょ?」

ミコ「うわぁ。なんか、雰囲気違いますね、ここ」

チヨコ「城の中だからな！」

カイコ「ふふっ。あつ、そのくるくる回転してるファイアーバー、
気をつけてね」

チヨコ「合点承知！……あつ！」

ミコ「あらら……。ぶつかってしまいましたね。チビマリオに逆戻りです」

チヨコ「くそぉー！」

カイコ「でも、ミスにはならないから、頑張つて進みましょう！」

チヨコ「もちろんだぜ！」

——そして——

チヨコ「うおっ！ 炎が飛んできてるぞ！ むっ、ボス発見！」

カイコ「あれがかの有名な大魔王クツパよー！」

ミコ「美味しそうな名前ですね」

カイコ「ふふっ、ラスボスはプルコギよ」

ミコ「ええっ!？」

チヨコ「嘘教えんなよ!」

ミコ「なんだ……残念です」

チヨコ「残念なのかよ!」

カイコ「ふふっ。まあ、今はクツパを倒しましょう」

チヨコ「しかしこれ、どうすりゃいいんだ。

踏んづけても、こっちがやられちまいそうだな……」

カイコ「あら、よくわかってるじゃないの。

「ご褒美にヒントをあげるわね! 右端のオノがヒントよ

」!」

ミコ「ヒントどころじゃないですね」

チヨコ「なるほどな。よっしゃ、ジャンプ!」

カイコ・ミコ「おお〜〜!」

(クツパ、炎の海に落ちていく)

ミコ「ボスなのに、あっけないですね」

チヨコ「ま、そんなもんさ！ オレの手にかかれば、ちょちょいのちょい、つてな！」

（その後も順調に進めていくチヨコ）

チヨコ「おっ！ 海の上のステージだな！」

ミコ「イカがいますね」

カイコ「名前はゲツソーよ」

ミコ「すごいネーミングですね……。でも、どうしてイカが空を飛んでいるのでしょうか？」

カイコ「もう、何度細かいことは気にしちゃダメって言わせるのよ」。

……そうだわ、今日のおやつはスルメにしましょう。

マヨネーズつけて食べましょうね〜！」

チヨコ「オッサンばいな。やっぱカイコ姉、年齢ごまかしてないか？」

カイコ「あら、チヨコ。いらないの？」

チヨコ「……いるに決まってるだろ！ 大好物だし！」

ミコ「チヨコ姉様、人のことは言えないじゃないですか……」

（そんなこんなで、ついに最終面）

チヨコ「はあ、はあ……。ようやくループを抜けたぜ……」

カイコ「よく頑張ったわね。

自力で抜けられるとは思ってなかったわ。チヨコの頭で

……」

チヨコ「カイコ姉、ケンカ売ってんのか!？」

カイコ「ふふっ、『冗談よ』」

ミコ「残るはラスボスだけですネ！

気合い入れてやっつけちゃってください、チヨコ姉様！」

チヨコ「おうよ！」

（そしてラスボス登場！ しかし……）

ミコ「あの……これ……」

チヨコ「うむ。ラスボスの大魔王クツパだ！」

ミコ「同じじゃないですか……」

カイコ「だけど、ハンマーも投げてるし、結構大変よ？」

チヨコ「フツ、このオレをなめてもらっちゃ困るぜ！ えいやっ！」

カイコ・ミコ「おお~~~~~！」

カイコ「一発で足の下をくぐり抜けるなんて……すごいわ〜！」

チヨコ「フン、だてにアクション好きを豪語してるわけじゃない
つてことさー！」

——で、エンディング——

チヨコ「ピーチ姫！ 助けに来たぜ！」

カイコ・ミコ「おめでとう（うざいます）〜」

(SE) パチパチパチ

チョコ「でも、解せんな……」

カイコ「あら、どうして？」

チョコ「だってさ、カッコいい王子様ならいいけど、

こんなヒゲオヤジに助けられるってのも、ちょっと微妙だ
る？」

ミコ「ま……まあ……」。

ですが、助けてくれたのですから、ピーチ姫だって素直に感謝するのでは？」

チョコ「でもよ、こういう場合、助けてくれた人と結婚するのがス
ジってもんだろ？」

ピーチ姫がかわいそうだぜ！」

ミコ「確かに……そうですね……」

カイコ「そんなふうに言われてるマリオのほうが、かわいそうな気が
するわ……」

ミコ「なんだかマリオが、無理矢理ピーチ姫に結婚を迫るひどい男
に見えてきました」

カイコ「こ……これ以上マリオの印象を悪くしないうちに、終わりに
しましょう！」

スルメ、持ってくるわね〜！」

チヨコ「待ってました！ おやつタイム！」

ミコ「わーい！ ありがとうございます、カイコ姉様！」

（こうして3人は、楽しくお喋りしながらスルメを美味しくいただくのだった）

ミコ「このゲッソー、美味しいですね！」

チヨコ「ゲッソー言うな！」

カイコ「ふふつ。それと、プルコギもあるわよ〜！」

ミコ「ラスボス来ましたね！」

チヨコ「違うっての！」

……………。

娘たち、3人とも、少々変わっている気がするな……………。
いつたい誰に似たんだか……………。

……俺しかないか。妻は超真面目人間だったからな……。

まあ、ともかく。

今どきこんなレトロゲームをやらなくてもと思わなくもないが、楽しく遊んでくれているようで安心した。

これからもずっと、姉妹3人仲よくしながら成長していつてくれればいいのだが。

さて……次はいつたい、なんのゲームで遊ぶつもりなのか。
俺にとっても、楽しみになりそうだ。

【ゲーム解説】

「スーパーマリオブラザーズ」

対応ハード：ファミコン 発売元：任天堂 発売日：1985年9月13日

言わずと知れた、世界一売れたゲーム。全世界で4000万本以上の売り上げを誇る。

その後もずっと続いているシリーズ。

あまりにも有名なため、とくに解説する必要もないと思うので、これくらいで……。

第1話 スーパーマリオブラザーズ（後書き）

こんな感じで書いていく予定です。

こういうのがアリなのか、食いついてくれる人がいるのか、それに、こんなネタで絵や画面写真もなくて楽しめるのか、よくわかりませんが……。

第2話 グラディウス

カイコ「それじゃあ、今回はコレ。グラディウスよ〜！」

チヨコ「また、ベタだな！」

ミコ「また、ベタですね」

カイコ「ベタでもいいのよ。さっさと始めなさいな。今回の担当はミコよ〜」

ミコ「わかってます、カイコ姉様」

ミコ「それでは、ゲームスタートです」

チヨコ「敵は、バクテリアンっていうみたいだな」

カイコ「なんか……いや〜な名前ね〜」

ミコ「ですが、出てくる敵、全然バクテリアっぽくないですけど」

チヨコ「ま、ここら辺はな。

先に進めば、ねちよねちよでぐちよぐちよのが襲いかかってくるぜ！」

ミコ「おおつ、それは楽しみです！」

カイコ「……楽しみなんだ……」

チヨコ「ま……まあ、ミコの趣味は置いておくとして。

ほら、パワーカプセルが出たぞ！ それを取ってパワーアップしていけ！」

ミコ「はい。カプセルを取るたびに光るゲージが移動して、欲しいパワーアップのときにAボタンを押せばいいんですよ」

カイコ「そうよ。カプセルを取るたびに毎回Aボタンを押したら、

凄まじくスピードアップしちゃうから注意してね」

チヨコ「それはそれで面白そうだな！」

ミコ「……嫌ですよ。クリアを目指すんですから」

カイコ「そうそう。ファミコンのグラディウスには、アルキメデスバージョンっていうのがあるのよ」

ミコ「あ……あるきめんです……？」

カイコ「当時大塚食品から発売されていたカップ麺の名前よ。

カップ麺っていつでも、お湯が不要で、あんをかけて食べる感じだったみたい。

食べたことなんてないけど」

チヨコ「オレらが生まれる前の商品だし！ 食べたことあったらおかしい！」

カイコ「2年くらいで製造中止になったみたいね。」

味が不評だったらしいから、ミコに食べさせたかったわ。」

ミコ「ちょ……！？ カイコ姉様、ひどいです！」

カイコ「ふふつ、冗談よ」

チヨコ「いや、絶対本気だった」

カイコ「ふふふつ、ノーコメントで」

ミコ「……この家にいると、ミコはそのうち姉様たちから、

とてもひどい仕打ちを受けてしまいそうな予感がします……」

チヨコ「姉様『たち』ってどういうことさ、『たち』って!？」

ミコ「……ノーコメントです」

カイコ「まあまあ。それで、そのアルキメンデスバージョンってのはね、

パワーカプセルがアルキメンデスの形になってるのよ」

チヨコ「ほほう。それで？ 取ったらなにか普通とは違った特典があったりとか？」

カイコ「ないわよ。グラフィックが変わってるだけ」

ミコ「え？　それだけですか？」

カイコ「ええ。他には、エンディングのメッセージが変わっているみたいけど、

基本的にはそれだけの違いよ」

チヨコ「なんだか、解せんな……」

カイコ「まあ、キャンペーンのプレゼントだったみたいだから、

そんなもんじゃないかしら？

ゲームソフト1本もらえるって考えたら、結構なものじゃない？」

ミコ「ですが、せっかくですから、もっと変わってほしいかなです
すね」

カイコ「それはそうね」。

プレミア価格で取引されてるし、そんな値段で買ったなら泣
けそう」

（などとお喋りしつつも、ゲームは進んでいく）

ミコ「オプション2つ目装備です」

チヨコ「おっ！　やっぱオプションだよな、このゲームは！」

ミコ「オプション2つまでっていうのは、ちょっと寂しいですね」

カイコ「ゲームセンターとかにあったゲームだと、4つまでつくものね」

チヨコ「ま、ファミコンじゃ仕方がなかったってことだな！」

カイコ「そうそう。オプション1つで攻撃力倍増だものね。2つあれば3倍よー！」

チヨコ「しかもオプション側は無敵ってのがいいよな！

単純に2倍の攻撃力ってだけじゃなくて、戦略性もあつて
！」

カイコ「チヨコは頭使うの苦手なくせに」

チヨコ「ぐっ……！」

カイコ姉だって、トロいからシューティングなんてできないくせに……！」

カイコ「トロいんじゃないくて、おしとやかなのよ」

ミコ「……とすると、ミコは暴れん坊な子ってことになるんですか？」

カイコ「ミコは元気いっぱいな子ってことよー！」

ミコ「……それならいいです」

チヨコ「単純な子でもあるな」(ぼそっ)

カイコ「そんな元気いっぱいなミコに朗報〜!」

ミコ「えっ?」

カイコ「スタートボタンで画面を止めて、2コンのマイクで『おっぷしょん!』って

大声で叫べば、なんとオプションが6つになるのよ!」

ミコ「ええっ!? ほんとですか!?!」

チヨコ「……………」

カイコ「ふふっ、やってみなさいな」

ミコ「はい! ……おっぷしょん! ……カイコ姉様、変わりましたよ?」

カイコ「タイミングが重要なのよ〜! もっと魂を込めて〜!」

ミコ「わかりました! おっぷしょん!」

カイコ「もっと大きく!」

ミコ「おっぷしょん!」

カイコ「もっと激しく!」

ミコ「おっぷしょん!」

カイコ「もつといやらしく!」

ミコ「いやら……? お……おつぷしょくん(ハート)」

チヨコ「カイコ姉、それ、ウソだろ……?」

カイコ「もちろんよ」 ああ〜ん、楽しかったわ〜

ミコ「ちょ……!? カイコ姉様〜!」

カイコ「ふふっ、ミコは素直でいい子ね」

(ミコの頭を撫で撫で)

ミコ「……ま、まあ、いいですけど……」

チヨコ「やつぱ、単純な子だな」(ぼそっ)

(順調に進み、ステージ3へ)

チヨコ「おっ、3面だな!」

カイコ「ふふっ、あのステージね」

ミコ「……出ました、モアイ像です！」

チヨコ「しかも……」

ミコ「わわっ、なにやら輪っかを吐き出してきましたよ！」

カイコ「イオンリングよ」

ミコ「父様が昔、タバコで作ってくれた輪っかと同じでしょうか」

チヨコ「同じわけあるか！ イオンリングを吐く父親がどこにいる！？」

ミコ「冗談だったのに……」

カイコ「ふふっ。あ、そうそう。

ミコ、モアイ像はイースター島にあるってのは、知ってるわよね？」

ミコ「はい、知ってます」

カイコ「だったら、実際にイオンリングを吐くってのも、知ってるわよね？」

ミコ「えっ？ そうなんですか！？」

カイコ「そうよ。イースター島っていうのはね、当時、文明の中心だったの。

宇宙人からの侵略から町を守るため、モアイ像は作られた

のよ」

ミコ「そ、そうなんですか！？ それに、宇宙人からの侵略……！」

チヨコ「そうそう。当時は激しかったらしいな」

カイコ「ええ。今でこそ随分と落ち着いたけど、それでもまだ安全とは言えないのよ」

ミコ「えええっ！？」

カイコ「ちよつと考えてみなさいな。

モアイ像……なにか似た響きのもの、思いつかない？」

ミコ「……………あつ、もしかして、モヤイ像ですか！？」

カイコ「当たり〜！ 渋谷駅にあるのが有名だけど、

伊豆諸島の新島にあるのが日本では元になっているわね」

チヨコ「蒲田駅にもあるんだよな！」

カイコ「そしてもちろん、宇宙人の侵略に対抗するために作られた像なのよ」

ミコ「し……知りませんでした。

ですが、渋谷のモヤイ像って、待ち合わせ場所にもなってますよね？」

人がたくさん集まる場所にあるなんて、危険じゃないんですか！？」

カイコ「ふふつ。モヤイ像が狙っているのはね、実は人間のほうなのよ」

ミコ「えっ!？」

カイコ「今どきの宇宙人ってね、巧妙に地球人に成りすまして紛れ込むものなの。

だからそれを見抜いて、イオンリングで撃ち抜くのが目的なの。

あつ、でも、人体には影響ないから安心していいわよ」

ミコ「イオンリングで撃ち抜かれた宇宙人は、どうなるんですか!？」

チヨコ「モヤイ像に食われる」

ミコ「た……食べるんですか!？」

チヨコ「ひと口でペロリだぜ!」

ミコ「恐ろしいです、モヤイ像……」

カイコ「たまに神隠しみたいに人がいなくなるのは、モヤイ像が地球人を誤認して、

食べてしまったから、とも言われてるわね」。

ミコも外出するときには、宇宙人に間違われないように注意してね」

ミコ「ど……どう注意すればいいんですか!？」

チヨコ「ぷっ……あっははは！ ミコ、素直すぎ！」

カイコ「ちょっと、チヨコ！ ふふふっ！」

ミコ「あゝっ！ 騙しましたね！？」

カイコ「ごめんなさいね。大丈夫よ、日本の技術力はすごいんだから。」

誤認で食べられたりなんてしないわ」

ミコ「……イオンリングは否定しないんですね……」

（そんなバカ話をしながらも、ステージ3はクリア）

ミコ「あれ？ なんですかコレ！？ モアイがくるくる回転してますよ！？」

チヨコ「おっ、ワープしたな！」

カイコ「ステージ4を飛ばして、ステージ5へ突入ね」

チヨコ「もったいないな！ ステージ4のBGMがいいのに！」

ミコ「むう。そう聞くと、なんだかとても残念になってきます」

チヨコ「だったらモアイにぶつかればOK！ 死んでステージ4が始まるぜ！」

ミコ「それはさすがに嫌です」

チヨコ「ちっ！」

カイコ「無事、ステージ5に来たわね」

チヨコ「触手ステージだな！」

ミコ「ようやく、バクテリアンって名前に相応しい敵が出てきましたね」

カイコ「まあ、ここは、それしか出ないけど」

ミコ「むづ。ある意味潔いとは思いますが……」。

ただ、いまいちグロテスク感が足りませんね……残念です」

カイコ「ミコはなにを期待してるのよ……」

チヨコ「ま、さくさく進めろ！」

ミコ「合点承知です！」

（順調にステージ6へ）

ミコ「アメーバです！ いいですね、単細胞生物！」

チヨコ「いや、戦闘機と同じくらいの大きさなんだから、
単細胞生物ってことはないんじゃないか？」

ミコ「ですが、やっぱりグロテスク感が足りません」

カイコ「ファミコンのグラフィックス性能でそこまで求めちゃダメ
よ」

チヨコ「それ以前に、グロテスク感を求める小学生ってのが、オレ
としては嫌だぜ……」

ミコ「あつ、なんだか要塞みたいなところに入っていきますね」

カイコ「最終面よ」。ミコ、頑張つて」

ミコ「バクテリアンっぽさが、またなくなりました。残念すぎます」

チヨコ「グロフェチ発言はもういいから。さくつとクリアしちゃえ
よ！」

ミコ「わかってます！ …… あつ、シャッターが閉まっています
！」

カイコ「閉じる前に通り抜けてね」

ミコ「もちろんです！ ……さて、いよいよラスボスですね！ わくわくします！」

チヨコ「期待に添った見た目と言えるかもだな」

ミコ「おおっ！ 脳みそです！ じゅるり」

チヨコ「なぜヨダレを拭く！？ ミコって、やっぱり変わってるな…」

ミコ「姉様方には負けます」

カイコ「私まで巻き込まれたわ。まあ、それはいいとして……ラスボスだけど」

ミコ「あれ？ なんか画面が変わりました」

カイコ「おめでと〜！ クリアよ〜！」

ミコ「はい？ ラスボス、戦ってませんよ？」

チヨコ「あの脳みそ、攻撃もしてこないけど、時間が経てばクリアになるんだ！」

ミコ「う〜〜。なんだか不完全燃焼です〜」

カイコ「ふふっ、そんなミコに朗報よ〜！」

ミコ「……悪い予感しかしませんが……」

チヨコ「エンディングの最後に、なんか、アルファベットが1文字表示されたな」

カイコ「ええ。それ、1周クリアごとに違う文字になっていて、

6周目まで見ると、ある単語になるのよ！

……というわけで、ミコ、頑張って6周クリアしてね！」

ミコ「マジですか！？」

カイコ「マジよ」。2周目は1周目と比べると難しくなってるから、不完全燃焼は解消されるはずよ、よかったわね」

チヨコ「6周目にまで進むと、すごく難しくなりそうだな！」

カイコ「……いいえ、3周目以降は2周目と変わらないわ」

ミコ「え……そうなんですか？ だったらせめて2周目まで——」

カイコ「6周クリアがノルマよ！ 終わるまで夕飯食べさせないからね」

ミコ「お……鬼がいます……」

チヨコ「ははは、ま、頑張れ、ミコ——」

カイコ「もちろん、チヨコも食べられないからね？」

チヨコ「鬼ババ——！」

カイコ「……死にたい？」

チヨコ「いえ……」

カイコ「それじゃあ、夕飯の準備してくるわね。」

あつ、ちゃんとクリア画面を確認しに来るから、ズルは無しね。」

ミコ・チヨコ「悪魔（です）……」

……。

カイコは少々、スツ気があるみたいだな。

おとなしそうな顔をしているというのに……。

だが、料理をしている姿は可愛らしいと言えるのかもしれない。
笑みを浮かべているのは、妹たちが喜ぶ姿を思い描いているからかな？

……あの煮物、ジャガイモをモアイ像っぽくカットしてあるな。
一緒に煮ているのは、イカリング……？

なるほど、ミコをからかうネタにしようって魂胆なわけか。

ま、それはそれで、姉妹のいいコミュニケーションになるだろう。どうせ俺には、なにも言う資格はない……いや、なにも言うことはできないのだが。

ただ、できれば、ひと言だけ。

「ミコ、頑張れ」と言ってやりたいな……。

【ゲーム解説】

「グラディウス」

対応ハード：ファミコン 発売元：コナミ 発売日：1986年4月25日

これも解説の必要はないでしょうけど。その後、ずっと続いているシリーズ。

ファミコン版は、1985年に登場したアーケード版からの移植。ハード性能的に完全移植はできず、オプションが2つまで、レーザーが短いなど、様々な違いがある。

また、ボーナス5000点、1UPといった隠し要素、ワープ、上下下左右左右BAのコナミコマンドなど、追加要素も多数用意されている。

第3話 たけしの挑戦状

チヨコ「というわけで、今回はたけしの挑戦状だ!」

カイコ「ちょちょちょ、ちょっと待って! ほんとに、それなの?」

チヨコ「もちろん!」

カイコ「今回って、私の担当よね?

これ、アドベンチャーゲームなの? アクションゲームじゃあ……」

ミコ「アクションアドベンチャーゲームですから、カイコ姉様の担当で間違いないです」

チヨコ「そういうことだ。観念しな!」

カイコ「うつうつ……だけど、いろいろ噂くらいは知ってるのよ?

1時間待たないとダメな部分があるとか……」

チヨコ「ま、そこは別の方法もあるみたいだけどな!

もつとも、苦勞するとは思うけど。ひっひっひ!」

ミコ「チヨコ姉様が悪魔のようです。

普段の仕返しをしようとほくそえんです」

カイコ「やっぱり、そういうことなのね……」

チヨコ「いやいや、せっかく父さんが遺してくれたゲームなんだぞ?

ちゃんと遊んでやらなきゃ、バチが当たるってもんだろ！」

カイコ「でも、おそらくお父さんも、こんなゲームクリアしてないと思うわ……」

チヨコ「こんなゲームって言うな！ 世界の北野に怒られるぞ！」

カイコ「きつと、怒らない気がする……」。

それにこのゲーム、クソゲーの代表とも言われてるわよね……」

ミコ「カイコ姉様、往生際が悪いです。早く始めましょう！」

カイコ「うつつ、わかったわよぉ」。

ふたりには、ベタなゲームを指定したのに、どうして私だけ……」

チヨコ「これもある意味ベタだろ！ 80万本くらい売れたらしいし！」

ミコ「80万本も売れたクソゲー……。なんだか、すさまじいですね」

ミコ「それでは、ゲームスタートですね」

カイコ「会社みたいね」

チヨコ「うだつの上がないサラリーマンが主人公らしい」

カイコ「そんな主人公、嫌だわ……」

チヨコ「左が社長室みたいだぞ」

カイコ「ふむ……。あつ、ボーナスをもらえたわ〜！」

ミコ「今どき現金手渡しなんて、珍しいですね」

チヨコ「今どきのゲームじゃないしな、これ」

ミコ「そうでした」

カイコ「社長さん、ありがとう……。あつ！」

チヨコ「うわっ！ カイコ姉、ひどっ！ 社長を殴ったぞ！」

ミコ「ボーナスのお礼は、こぶしですか……」

カイコ「そ……。そんなつもりはなかったのよ〜？

ただ、ボタンを間違えて押しちゃただけで〜……」

チヨコ「ま、せっかくだし、殴り殺しとけ！

このゲームならできるし！」

カイコ「ひ……。ひどいゲームね……。そこまで悪女じゃないわ、私」

ミコ「すでに一発殴ったあとですから、あまり説得力はありません

けどね」

カイコ「うるさいわね。とにかく、会社の外に出るわ」

チヨコ「頑張れ、カイコ姉！」

カイコ「……きゃっ、いきなりヤクザに殴られたんだけどー!？」

ミコ「恐ろしい町ですね」

カイコ「えっ？ 今度は警官まで殴ってきたわよー!？」

ミコ「どうやら、警官じゃなくてガードマンらしいですけどね」

チヨコ「ふっふっふ、世の中の厳しさを思い知れ！」

カイコ「こんな世の中、ありえないわ……」

ミコ「カイコ姉様、そんなにのんびりしてると……」

カイコ「あゝ、殴り殺された……?」

チヨコ「へっへっへ、ゲームオーバーだな！」

ミコ「葬式が始まりました……」

カイコ「悲しい結末ね……。じゃあ、今回はこれで終わ——」

チヨコ「終わらねーよ！ しっかりクリアするまでやるんだ！」

カイコ「えええ~~~~!？」

チヨコ「くつくく、血反吐を吐いても終わらないからな！ 覚悟しとけ！」

ミコ「チヨコ姉様が極悪人です……」

（カイコ、どうにか頑張って進めようとするも、まったくわからず）

カイコ「うつうつ……」

ミコ「何度目の葬式でしょうか……」

カイコ「こんなの無理……どうすればいいのか、わからないわ……」

チヨコ「いつひっひ、カイコ姉が涙目になってるなんて、珍しいよな！」

カイコ「む……」（いらいら）

ミコ「……さすがにちょっと、かわいそうな気がしてきました……」

チヨコ「確かに、これ以上やると、イライラで大爆発しそうだよな。そんなカイコ姉の姿も見てみたいけど……」

ミコ「ですが、確実にミコたちにも被害が及びますよ」

カイコ「がるるるるる……」

チヨコ「うなり始めた！ 限界が近いか！ ……仕方がない！

カイコ姉！ オレが攻略サイトを見ながらナビするから！
だからファミコンを破壊するなよ！」

カイコ「そ……そんなことしないわよ！ でも、ナビはお願い……」

チヨコ「お願いしますだろ？」

カイコ「お……お願いします……」

チヨコ「くっつ！ 気分いいな！」

ミコ「……チヨコ姉様、調子に乗っていると今度逆襲されますよ？」

チヨコ「とりあえずな、このゲーム、死んでも大丈夫だ」

カイコ「えっ？」

チヨコ「死んで手足をバタバタしてるあいだに、

Bボタンを押しながらAボタンを3回押すとその場で復活

するんだ」

カイコ「な……なによそれ!？」

チヨコ「しかも体力も満タンで復活だ」

ミコ「……ゲームバランスもなにも、あつたもんじゃないですね……」

チヨコ「それと、セレクトボタンでメニューを開いて戻ると敵が消えるつてのもある。

これを使えば、殴られずに進むことができるぞ」

ミコ「……それもまた、ゲームバランス崩壊な感じですね……」

チヨコ「バランスだとか、そんなことを考えちゃいけないんだよ!」

カイコ「やっぱり、すさまじいゲームね」

チヨコ「あとは、セレクトメニューの『おわる』でパスワードが見れる。

それをメモっておけば、途中から再開可能だ。

座標まで残るわけじゃないから、そんなにこまめにメモする必要はないけどな」

ミコ「パスワード……。セーブ機能はないんですね……」

カイコ「この頃のゲームだと、それが普通だったみただけだね」

（ともかく、チヨコのナビに従いゲームを進めるカイコ）

チヨコ「社長にボーナスをもらっただけじゃなくて、辞表を提出して退職金ももらっんだ」

カイコ「ボーナスをもらってすぐに辞めるのね……。なんだか、ひどい社員だわ」

チヨコ「当然の権利だろ！」

ミコ「ついでに、植木の中のへそくりも持っていきましょう」

カイコ「……窃盗になるんじゃないかしら……」

チヨコ「気にしない気にしない！ さあ、次は、カルチャークラブで技能習得だ！」

ミコ「ひんたば語、ハンググライダー、三味線の3つですね」

カイコ「ひんたば語……。そんな変な言語を覚えなきゃならないのね……」

チヨコ「それじゃあ、ここから先は、ひんたば語で会話してみよう！
カイコ姉、どうぞ！」

カイコ「ええっ！？ えゝっと……。
ひんたばうんたば……って、喋れるわけないでしょー！」

チヨコ「一瞬カイコ姉が壊れたみたいだったぜ！ 面白かった！」

ミコ「今日のチョコ姉様は、とっても活き活きしてますね」

チョコ「次は、トラベル玉川で南太平洋行きのチケットを買っぞ！」

カイコ「……もう、ストーリー展開とか完全無視って感じなのね」

ミコ「攻略することが前提のやり方っばいですからね、そんなもんでしょ」

チョコ「次はパチンコ屋だ！」

ミコ「まだ18歳になってませんから、ダメですよ」

カイコ「主人公はサラリーマンだから問題なしよ」

チョコ「そうそう。カイコ姉はおばさんだから問題なしだ！」

カイコ「ちよつと！？ 私じゃなくて、主人公よー！」

ミコ「玉を100発買いましょう」

カイコ「一番安い100発でいいのね？　じゃあ、パチンコスター
ト〜！」

……なによ、全然入らないじゃない……」

チヨコ「下手くそだな！ まあ、それでいいんだけど」

カイコ「むゝ。玉がなくなっちゃう」

ミコ「そこでコレの出番です！」

カイコ「2コン？」

チヨコ「そうだ。玉が0になったら、2コンのマイクで叫ぶんだ！
玉が出ねゝぞ、こらゝ！ ってな！」

カイコ「あのねえ……」

ミコ「いえ、カイコ姉様、これは本当です。攻略サイトにも書いて
あります」

カイコ「ええっ！？」

チヨコ「ほら、玉がなくなるぞ！ カイコ姉、でっかい声ではつき
りと叫べよ！」

カイコ「う……、わかったわよ。ふう……。

た……玉が出ねゝぞ、こらゝ！」

ミコ「おおゝ！ カイコ姉様らしからぬセリフです！」

チヨコ「結構燃えるシチュエーションだな！」

カイコ「変なことに燃えないで……」

チヨコ「のんびりしてる暇はないぞ！ ヤクザが出てきてる！
さくつと殴り倒してしまえ、暴れん坊カイコ！」

カイコ「誰が暴れん坊よ！ ……えいえいえい、倒したわ〜！」

ミコ「さすがカイコ姉様です」

カイコ「ミコも密かに、私を陥れて楽しんでる感じよね……」

ミコ「い……いえ、そんな、めっそうもございません……」

カイコ「どうして目を逸らしてるのかしら〜？」

チヨコ「まあまあ。

とりあえず、玉を5000発ゲットしたから、それを三味
線に交換だ」

カイコ「ヤクザからパチンコ玉を巻き上げるなんて……。

この主人公、ほんとに、うだつの上がないサラリーマン
なの〜？」

ミコ「カイコ姉様、細かいことを気にしてはいけません。

スーパーマリオのときに、さんざん言われましたよ？」

カイコ「そ……そうだったわね……」

チヨコ「さて、次はカラオケスナックあぜ道だな！

とりあえずお酒を2杯飲んで3杯目を断ると、カラオケタイムだぜ！」

カイコ「なんだか、嫌な予感……」

ミコ「……………」

（ミコは無言で、2コンをカイコに手渡す）

チヨコ「さあ、歌え！」

カイコ「やっぱり！」

チヨコ「選べるのは4曲しかないけどな。

元気よく、はつきりと、大声で歌うんだぞ！」

ミコ「3回連続で、上手いと褒められないといけないですよね」

チヨコ「演歌を選んだな！ 雨の新開地、歌うは我が家の長女、カイコ！」

ミコ「よっ、待ってました！」（パチパチパチ！）

カイコ「ちょ……ちよっと、そういうのやめてよ」

チヨコ「ほら、始まるぞ！」

カイコ「あ……あゝなたゝのたゝめなゝら……」

（恥ずかしがりながらも歌いきるカイコ。でも——）

チヨコ「下手くそ！　だつてさ！」

ミコ「1度でも下手くそ判定になったら、お酒を飲むところからやり直したそうです」

カイコ「むむ……面倒なのね……」

（再びカラオケに挑戦するカイコ。だけどやっぱり——）

チヨコ「下手くそ！　もっと大声でしっかり歌え！」

ミコ「カイコ姉様、他の歌もありますよ？　はとぼっぽとか……」

チヨコ「おつ、そっちのほうガバカっぽい！　じゃなくて……」

カイコ「本音がただ漏れね……」

チヨコ「ともかく歌え！　カイコ姉、はとぼっぽだ！」

カイコ「わかったわよ。ぽっぽっぽ、はとぼっぽ……」

（何度も何度も挑戦。だけど、どうしても成功せず）

カイコ「うつうつ……」

ミコ「またしても、カイコ姉様が涙目に」

チヨコ「やっぱり気分いいな！ ま、これくらいで許してやるか！」

カイコ「え……？」

チヨコ「ここ、2コンのマイクで歌わなくても大丈夫な方法があるんだよ」

カイコ「さ……先に言いなさいよー！」

ミコ「まあまあ、カイコ姉様。チヨコ姉様の首を絞めないでください」

チヨコ「ごほごほっ！ マジで首を絞めてくるとは、カイコ姉、ひどいぜ……」。

ともかく、2コンの下+Aボタンでマイクの代用もできるんだ。

それで、歌い始めから押しっぱなしにして、最後にウィンドウが消える瞬間、

ボタンを離すようにすると、結構楽にクリアできるみたいだぜ！」

カイコ「知ってて教えないチヨコのほうが、よっぽどひどいわ……」。

ああ……私、何度も大声で歌っちゃった……」。

「近所に聞こえたりしてないかしら……」

チヨコ「バッチリ聞こえてたと思うぜ！」

カイコ「うつうつ……」

（ともかく、どうにかカラオケをクリア）

ミコ「あつ、ヤクザが出てきました」

カイコ「またなのね」

チヨコ「さくつと倒しちゃえ、カイコ姉」

カイコ「はいはい」

ミコ「殴り倒すことにも慣れてきましたね、カイコ姉様。さすがです」

カイコ「もう、ミコったら、またそんなことを……。……ヤクザ退治終了っ」

チヨコ「完全に慣れてるじゃん。ほら、じいさんが出てきたぞ」

ミコ「殴り倒すんですね！」

カイコ「あなたたちは、また、そういうことを……」。

殴ったりなんて、しないわよ。私はおしとやかな淑女な

んですから」

チヨコ「……………」(ニヤリ)

カイコ「……？」

チヨコ「まあ、とりあえず、ホステスが邪魔だから倒そう」

カイコ「ちょ……ちょっと、それはひどいでしょ！」

ミコ「いえ、倒さないとじいさんが話しかけてくれないみたいです」

カイコ「えええ〜？ そうなの〜？ ……仕方ないわね……………」

チヨコ「容赦なくホステスを殴り倒すカイコ姉！」

カイコ「私じゃなくて主人公が勝手にやっただけよ〜」

ミコ「……じいさん、白い紙を渡してくれましたね」

カイコ「あつ、これ知ってるわ。1時間待つとかいう……………」

チヨコ「大丈夫。水に浸けるを選べば、5分待ちでOKだ」

カイコ「それでも5分は待つのね……………」

——で、5分後——

チヨコ「ここで歌うと、地図が浮かび上がるんだ！

さあ、カイコ姉、マイクに向かって歌うんだ！」

カイコ「歌わないわよ！……2コンの下+A……っ」と

ミコ「むゝ、つまらないです、カイコ姉様」

カイコ「ふん。ゲームが進めばいいのよゝ！

これ以上恥ずかしい思いなんてしたくないわ！」

チヨコ「ま、歌う必要もなかったんだけどな。

マイクでなにか喋るだけで大丈夫だったし」

カイコ「チヨコ……」

ミコ「ほら、カイコ姉様！無事、地図をゲットしましたよ！」

チヨコ「よし！それじゃ、じいさんを殴り倒そう！」

カイコ「だからゝ！そんなことしないって、さっきも言ったでしよゝ？」

チヨコ「いいのか？」

カイコ「え……？」

チヨコ「倒さないとクリアできないぞ？」

カイコ「えええゝっ！？」

ミコ「カイコ姉様、残酷なようですが、これが現実というものです……」

カイコ「ちょ……、ほんとに?」

(こくん。黙って頷くふたり)

カイコ「……うつ、ごめんなさい、おじいさん……」

チヨコ「カイコ姉がじいさんを殴り倒した!」

ミコ「カイコ姉様、人でなしです……」

カイコ「……ほんとにクリアに必要なの?!? 騙してない?」

チヨコ「くつくつく、さて、どうかな?」

カイコ「もう?」

チヨコ「それじゃあ、カイコ姉。次は酒を飲んで酔っ払って潰れてくれ」

カイコ「な……なによそれ?」

ミコ「いえ、それが必要なんですよ」

カイコ「む……。ぱたり」

チヨコ「カイコ姉が酒飲んで暴れて潰れた〜!」

カイコ「暴れてない〜! だいたい、私じゃなくて主人公だってば〜」

ミコ「でも、奥さんが怒ってますよ!」

カイコ「結婚してたのね、この人……」

チヨコ「奥さん、殴ってきてるけどな!」

カイコ「ちよつと! また殴り倒すの? ……あつ、なにか選択肢が……」

ミコ「ここで、離婚するわけですね」

カイコ「離婚しちゃうのね……。なんだか、悲しい……」

チヨコ「いやいや、酒飲んで潰れたからって殴りかかってくる嫁なんて、

離婚されて当然だろ!」

ミコ「ミコには、どっちもどっちに思えます……」

チヨコ「とりあえず、慰謝料を取られて所持金が半分になったから、銀行で預金を下ろそう。5万しかないけどな」

カイコ「もつと貯めておきなさいよね……」

チヨコ「そして、日本を出る！」

カイコ「国外逃亡！？」

ミコ「カイコ姉様、違いますよ。

宝の地図をゲットしたわけですから、宝探しの旅に出かけるんです！」

チヨコ「もつとも、この先も困難の連続だけだな！」

カイコ「……もつと平穏な人生を送りたいわ……」

（飛行機で日本を飛び立ち、ひたんぼ島に到着）

カイコ「あつ、服装が変わってるわ」

チヨコ「南の島だからな！」

ミコ「……現地の人も殴ってくるんですね」

カイコ「旅先も危険がいっぱいってことね」

チヨコ「ここでやることは、銀行で両替して、

土産物屋で刺繍、装備屋で水筒と銃を買うことだな」

ミコ「そしてリゾートセンターからハンググライダーで飛び立ちます」

カイコ「攻略サイトのナビありだと、言われたとおり進めるだけね」

チヨコ「おつ、それじゃあ、ここからは自力でやってみるか？

カイコ「……嫌よ。きっとこの先も、不条理なクリア法とかなんでしょ？」

ミコ「バレてますね」

チヨコ「ま、そういうゲームだってことだな！」

（そしてハンググライダーステージへ）

カイコ「敵が出てきて、弾も撃てて、シューティングゲームみたいね」

チヨコ「ま、ハンググライダーだから上に移動できないけどな！」

カイコ「あら、ほんと……。一気に難易度上がった感じがするわ」

ミコ「風に乗ると、少し上昇できますけどね」

（案の定というかなんとというか、全然クリアできないカイコ）

カイコ「うつうつ……。こういうのはミコの得意分野なのに」

チョコ「カイコ姉は、反射神経鈍すぎだからな！」

ミコ「頑張ってください、カイコ姉様！」

カイコ「……代わってくれたりは、しないのね……」

チョコ「そりゃあ、今回の担当はカイコ姉だからな！ くっくくく！」

カイコ「……次回、覚えてなさいよ、チョコ……！」

ミコ「まあまあ、カイコ姉様。

ケンカをするためにレトロゲームをしてるわけじゃないんですから。

天国にいる父様だって、楽しく遊ぶミコたちの姿を見たいはずです」

カイコ「……そうね。ミコは、やっぱりいい子ね」

ミコ「代わったりはしませんけどね」

カイコ「やっぱり悪い子ね……」

ミコ「カイコ姉様、ひどいです」

（苦勞はしたものの、ハンググライダーをどうにかクリア）

カイコ「ようやくクリアできた……」

チヨコ「まあ、まだ先は結構長いけどな！」

ミコ「頑張ってください、カイコ姉様！」

カイコ「そろそろ気力も限界に近いけど……」

チヨコ「ま、さっさと進めよう。ここはチヨバリン島だな！」

ミコ「ほこらに入って出ると、ワープしてるみたいですね」

カイコ「敵もたくさん出てくるけど、復活できるし問題なしね。

やっぱり、このゲームって普通じゃないわ……」

チヨコ「ここはしっかりナビしてやるかな。

ジャングルを抜けると、民家がある。一番最初の民家に入ること」

カイコ「……間違うとどうなるの?」

チヨコ「出られなくなる」

カイコ「不条理だわ……」

ミコ「おや？ なにやら、捕まってしまいましたよ？」

カイコ「えっ？ ここもハズレ？」

チヨコ「いやいや。芸をすれば抜けられる。

三味線を持ってて、しかもちゃんと習得しててよかったな
！」

カイコ「ほんと、不条理な展開だわ……」

チヨコ「さあ、カイコ姉！ 芸ってことは、三味線を弾きながら歌
うんだ！」

カイコ「えっ？」

（ミコ、無言で2コンを手渡す）

カイコ「わかったわよ。……なにを歌えばいいの？」

チヨコ「はとぼっぽで、いいんじゃないね？」

ミコ「そうですね。頑張ってくださいー！」

カイコ「うつつ……。ぼっぽっぽ、はとぼっぽ……。……」

チヨコ「ふう。堪能した！」

ミコ「もちろん、マイクで歌う必要なんてなかったわけですが」

カイコ「途中で気づいたわ。下+Aでよかったのよね」

ミコ「いえ、それすら不要だったんですが」

チヨコ「うむ！ 面白い余興であつた！」

カイコ「ちょ……チヨコ！？」

ミコ「まあまあ、カイコ姉様。まだゲームは続いていますから」

カイコ「山の上にほこらがあるわね。でも、ジャンプしても登れないわ」

チヨコ「しゃがんだ状態でジャンプすると、大ジャンプできるぜ！」

カイコ「……あら、ほんと。知らなかったわ。ここまで全然必要なかったものね……」

ミコ「このためだけにある仕様って感じですね」

チヨコ「ほこらの仙人には、水筒をプレゼントだ！」

カイコ「なぜに水筒……」

ミコ「そしてまた、最初の民家に戻って、今度は刺繍をプレゼントです」

チヨコ「お礼に聖なる石をもらえるぞ！」

カイコ「不条理よね……。どれが当たりだとか、ヒントであるの？」

ミコ「なさそうですよね……」

（ともかく、一番高い山へ）

チヨコ「まず、あの山の頂上へ登るんだ！」

カイコ「大ジャンプね。……1回じゃ無理だわ。でも……」

ミコ「カイコ姉様、さすがに、このゲームの世界に慣れてきてますね」

カイコ「あまり染まりたくはない世界だけど」

チヨコ「で、攻略の続きだけど、頂上でウンコするんだとさ」

ミコ「ほほう」

チヨコ「というわけで、カイコ姉、今ここで実際にウンコを――」

カイコ「しないわよ！ まったく……。きつとこうでしょ、座るだけとか。……ほら」

ミコ「やっぱりカイコ姉様、この世界に染まってます」

カイコ「嫌々、染まりたくないっ！」

（というわけで、洞窟内部へ潜入）

チヨコ「ここから地下4回まで降りていくんだ。下への道は、またウンコだけだな！

カイコ姉、ここでも実際にウンコを――」

カイコ「しないって言うてるでしょ？」

だいたい、仮にも女の子なんだから、そんな汚いこと言わないのっ」

チヨコ「仮にもってなんだよ……」

ミコ「それはともかく、マップは結構広いですよ？」

チヨコ「カイコ姉、教えてほしかったら、せめてウンコ座りをお願いしろ！」

カイコ「どうしてウンコ座りなのよ？」

ミコ「……カイコ姉様も、汚いことを口にしましたよ？」

カイコ「う……。ふん、いいわよ、自力で座る場所を見つけるから」

（数分後――）

カイコ「……チヨコ……、お……お願いします……」

チヨコ「ふむ！ほんとにウンコ座りまでするとは！」

カイコ「チヨコがやれって言ったんじゃない……」

ミコ「またカイコ姉様が涙目です。次回の仕返しが怖いですね、チヨコ姉様」

チヨコ「カイコ姉が勝手にやっただけだし。オレは冗談で言っただけだったのにさ！」

カイコ「ひどい……」

（ともかく、どうにか地下4回までたどり着く）

カイコ「合計3回も、ウンコ座りでお願いする羽目になるなんて……」

ミコ「カイコ姉様の勇姿、ミコの目にしっかりと焼きつけました！」

カイコ「焼きつけないで……」

チヨコ「こっちは写メも撮ったけどな！」

カイコ「うつうつ……」

チヨコ「……おや？ 制服のスカートのまま深く腰を落としてるせいで、

完全にパンツまで見えてるな、この写真！」

カイコ「ちょ……ちょっと！ さすがにそれは消してよ！」

チヨコ「いい脅しアイテムをゲットできたぜ！

さて、ゲームを進めよう、カイコ姉！ もうちょっとで終わりだ！」

カイコ「うぐぐぐ……。わかったわよ……」

（そして財宝とご対面）

カイコ「ようやく……ようやくクリアなのね……！」

チヨコ「ちなみに、じいさんを倒してないと、ここで財宝を横取り

されてジ・エンド」

カイコ「ひどい！ でも、倒さないとダメっていうのは、ほんのことだったのね」

ミコ「カイコ姉様、ミコたちを信用してなかったんですか？ ひどいです……」

カイコ「さんざん人をもてあそんでおいて、なにを言うのかしらね」

チョコ「で、エンディングだけど……」

ミコ「この顔は、たけしさんですね」

カイコ「えらいっ！ ……って、なによ、これだけ!？」

チョコ「慌てるな。5分待つと真のエンディングがあるぜ!」

カイコ「……もう、嫌だわ、このゲーム……」

—— 5分後 ——

ミコ「あつ、新たにメッセージが出ました」

カイコ「え〜っと……」。

『こんなゲームに、マジになっちゃって、どうするの』……
「……?」

チヨコ「これで本当に終わりだ！」

カイコ「ひどいわ〜！」

ミコ「それに、スタッフロールなんかも無いんですね」

チヨコ「これぞ世界の北野クオリティ！」

カイコ「そう言っちゃうのは、いろいろと問題がある気がするけど……」

ミコ「とにかく、カイコ姉様、クリアおめでとございますー！」

カイコ「なんだか、素直に喜べない結末だったわね〜……」

チヨコ「いっひっひ！ 今日हतっぷり楽しませてもらったぜ！」

カイコ「あら、楽しみはまだ終わってないわよ〜？」

チヨコ・ミコ「え？」

カイコ「今日の夕飯で、たっぷり仕返しさせてもらっから、覚悟しといてね〜？」

ミコ「ちょ……、カイコ姉様、ミコもですか？」

カイコ「ふふっ、当たり前よ〜！」

ふたりの嫌いな食材、目いっぱい使っちゃうからね〜」

チヨコ・ミコ「そ……そんなぁ……」

料理を作るのがカイコの役目になっているのだから、
こういった仕返しが来るのは目に見えていたと思うのだが。
チヨコもミコも、まだまだ子供ということか。

だが、なんといか……。

よくあのゲームをクリアしたものだな。

今はネットで攻略法も簡単に見られるから、楽な世の中なのかもしれないが。

俺がああゲームを買った頃は、クリアなんてできるとは思えなかったな。

攻略本は発売されていただろうが、さすがに買わなかったし……。

それにしても、できればもっと楽しくゲームをしてもらいたいところだ。

和気あいあいと対戦ゲームでもして遊べばいいのに。

……いや、あの3人だと、すさまじい騙し合いとかになりそうだな。

今後もいろいろと意地悪の応酬が繰り広げられそうで怖いが……。
とはいえ、それはそれで、ひとつの遊び方ではあるのか。

【ゲーム解説】

「たけしの挑戦状」

対応ハード：ファミコン 発売元：タイトー 発売日：1986年
12月10日

ビートたけしが監修したゲーム。本編でも触れたとおり、クソゲーと言われることも多い。

タイトルが示しているとおり、ビートたけしからの挑戦という感じの作品。

「謎を解けるか。一億人。」というキャッチコピーだった。
とはいえ、この不条理さは、ゲームとしてはどうなのか……。
なお、テレビCMには、ビートたけし本人が出演していた。

第4話 スペランカー

カイコ「今回はチヨコの担当ね。遊ぶゲームはコレ、スペランカーよ〜！」

チヨコ「くっ……前回の仕返しかつ!？」

カイコ「ふふっ。べつに、そういうわけじゃないわよ〜?

クソゲーって言われることもあるけど、そうじゃない! って擁護する声も、

結構多いみたいだから」

ミコ「ですが、最弱の主人公とか言われているゲームですよね?」

カイコ「そうね〜。1キャラ分くらいの高さから落ちても死ぬし〜。

正確には首の高さくらいらしいけど」

チヨコ「やっぱ、クソゲーっぽいぞ?」

カイコ「ふふっ。とりあえず、やってみなさいな。

ちよっとシビアなゲームかもしれないけど〜」

ミコ「頑張ってください、チヨコ姉」

チヨコ「よっしゃ! やってやるぜ!」

チヨコ「それじゃあ、カセットを差し込んで……電源オン！
……おや？」

ミコ「いきなりバグってますね」

カイコ「ふふつ、差し込み方が悪かったのよ」

チヨコ「これもよく聞く話だな！」

ミコ「端子部分に息を吹きかけるといってやつですね！」

カイコ「どこまで効果があるかは、謎だけだね」

チヨコ「ま、やつとくか。ふーふー！」

カイコ「チヨコの口臭で、カセットがダメになったりして」

チヨコ「なるか！　っていうか、口臭がひどかったりなんてしないから！」

ミコ「ニオイでダメになるカセットなんて、それこそダメダメだと思いますが」

チヨコ「ともかく、気を取り直してスタートだ！　リフトを下ろして……」

カイコ「……いきなり死んだわよ？」

チヨコ「ジャンプしないと届かないか」

ミコ「それは当たり前だと思います」

チヨコ「ま、さくさく行くぜ！……うつ」

カイコ「今度はツタから落ちて死んだわね」

チヨコ「こなくそ！」

ミコ「……今度は下り坂でジャンプして死にましたね」

カイコ「ゲームオーバーだわ」

チヨコ「なんだこのゲーム！」

ミコ「ですが、今のつて完全にチヨコ姉様の操作ミスですよね？」

チヨコ「う……まあ、そうだけど……」

カイコ「しかも、コンティニューできないからね」

チヨコ「裏技とかで存在してないのか？」

ミコ「ないみたいです。諦めてください、チヨコ姉様」

チヨコ「鬼ゲーか！」

カイコ「まあまあ。慣れれば結構いい感じに進めるみたいよ？
ステージはたったの4つだけだから、頑張つてね」

チヨコ「おっ、なんか出てきたぞ？」

カイコ「ゴーストね。銃で退治できるわよ」

チヨコ「Bボタンか。えいっ！　む……銃を撃ったら動けなくなっ
たぞ！？」

ミコ「撃っているあいだ、動けなくなるみたいですね」

カイコ「しかも、撃ったあとゴーストは消えながら迫ってくるわ。
完全に消える前にぶつかったりしたら死ぬからね」

チヨコ「ある程度離れた位置から撃てってことか」

ミコ「横に向かって撃つグラフィックですが、真上や真下でも効果
がありますし、

直線距離が近ければ倒せるみたいですね」

カイコ「ハシゴやツタの昇り降り中には使えないけどね」

チヨコ「おっ、今度はコウモリがいるな」

ミコ「洞窟といったら、コウモリが基本ですよね！」

チヨコ「何千羽もいて、龍のように連なって洞窟から空に飛び立つ
ていく映像とか、

テレビで見たことあるな！」

カイコ「そんなにいたら、大変なことになるけどね」

チヨコ「そうなのか？ ん？ なにやら変な音が鳴ってるぞ」

カイコ「コウモリがフンをしている音よ」

ミコ「やけに派手な音を立てながらフンをするんですね……」

カイコ「もちろん、フンに当たっても死ぬわ」

チヨコ「どれだけ精神力弱いんだよ、主人公！」

ミコ「いえ、きっと皮膚から侵入する猛毒を含んでいるフンなんですよ」

チヨコ「なぜコウモリは死なない！」

カイコ「ふふっ、自分の毒では死なないものよ」。

ともかく、1匹だけだったら大して怖くないわ。さくつと進みましょう」

チヨコ「でも、上手くタイミングを合わせないと、さくつと死ぬけどな」

（操作にも慣れてきたようで、結構さくさく進めるように）

カイコ「いい感じね」

チヨコ「ふっふっふ、オレにかかれば楽勝……ぐっ！」

カイコ「あら、ジャンプミスして穴に落ちたわね」

ミコ「チヨコ姉様、油断大敵です」

カイコ「イージーミスを起こさない慎重なプレイも要求されるわね」
「」

チヨコ「くっ！ オレには向かない気もするが……頑張つてやる！」

カイコ「ふふっ、ガサツで大雑把なものね、チヨコは」

ミコ「それがチヨコ姉様のいいところでもあるんですよ」

チヨコ「ミコ……無理なフォローはいらないぜ……」

カイコ「あつ、ほら、あそこ！ 鍵があるわよ」

チヨコ「そうだな。でも、罠っぱさがプンプンしやがる」

カイコ「手前の地面の下に、大きな穴が開いてるものね」

チヨコ「きつと床が抜ける……とすると、こうだな！」

ミコ「おおっ！ 手前の床に着地ですね！ 上手いです、チヨコ姉様！」

チヨコ「ふふん、オレにかかれば、ちょちょいのちょいさ！」

カイコ「……そして、ジャンプミスで穴に落ちて死ぬのね」

チヨコ「くっ……イージーミスが多いな……」

ミコ「チヨコ姉様、今度は岩がありますよ」

チヨコ「爆弾で爆破するんだな！ ……む、死んだっ！？」

カイコ「爆風でも死ぬから、離れないとダメなのよね」

チヨコ「爆風なんて見えなかったのに……」

ミコ「心の目で見erんです！」

カイコ「古いゲームを楽しむには、想像力も必要なのかもしれないわね」

チヨコ「ま、慎重にゆっくり進めば問題ないだろ」

ミコ「チヨコ姉様が悟ってしまいました。つまらないです」

カイコ「だけど、残念ながらそうもいかないのよね」

ミコ「そうでした。画面上のエネルギーメーターがなくなると、死ぬんですよ」

チヨコ「ひでえ！」

カイコ「途中に落ちてるエネルギーを拾えばエネルギーがMAXになるから、

上手く進めていく必要があるわ」

チヨコ「どうでもいいけど、エネルギーって、いったいなんだろうな？」

この主人公ってロボットなのか？」

カイコ「探検家のはずなのに……変ねえ……？」

ミコ「まあ、細かいことは言いつこなしです」

チヨコ「次は、トロッコで移動だな。上からなんか出てきてるけど……」

カイコ「毒ガスらしいわよ。当たったらもちろん……言うまでもないわね」

ミコ「トロッコなのに、普通に移動できるんですね。つまらないです」

カイコ「アトラクションとかじゃないんだから」

チヨコ「だけど、オレも一気に突っ走るのかと思ったぜ！」

カイコ「そんなことしたら、確実に毒ガスの餌食になるわよ」

チヨコ「ま、問題なく突破。赤と青の扉を鍵で開けて……」

カイコ「おめでとうー！ これで1面クリアよー！」

ミコ「結構短いですね」

チヨコ「大したことないな、スペランカー！ これなら楽勝だぜ！」

（2面に入っても、順調に進めていくチヨコ）

カイコ「順調に進んでるわね。つまらないわ」

ミコ「ガスを噴き出す岩とコウモリのフンのコンボも、さくつと抜けましたね」

チヨコ「ふっふっふ、楽勝楽勝っ！」

カイコ「次はツタが連続で並んでる場所ね」

チヨコ「ふっ、こんな問題なしだぜ！ ……おや？」

ミコ「……死にましたね」

チヨコ「な……なぜだ〜!？」

カイコ「ツタをジャンプで伝っていくときに、天井に頭をぶつけると死ぬみたいね〜」

チヨコ「ひどいな……」

ミコ「ここまで来たのにゲームオーバーになっちゃいましたね」

カイコ「コンティニューできないから、最初からやり直しになるわね〜」

チヨコ「やっぱり鬼だ、このゲーム!」

カイコ「ふふつ。昔のゲームって、そういうのが多かったみたいよ〜」

チヨコ「ようやく3面まで来たぞ!」

カイコ「お疲れ様〜。同じことを繰り返すのって、大変よね〜」

ミコ「1度抜けている場所で死んだりもしましたけどね」

チヨコ「うるさい!」

ミコ「あつ、水に浮かんでいる壺がありますよ」

チヨコ「なんだか、アトラクション的な展開の予感！」

カイコ「でも、そういう展開にはならないのよね」

チヨコ「トロツコと同じかよ！」

ミコ「つまらないです。壺に乗って水の上を流れていく大冒険を思い描きましたのに」

カイコ「まあまあ。次は間欠泉の上にボートが乗っかっている感じね」

チヨコ「勝手に床が上下してるだけってことだろ。楽勝だぜ！」

ミコ「油断しないほうが……」

チヨコ「うあつ、下りで乗ろうとしたら死んだ!？」

カイコ「予想どおりだけど、落下扱いになっちゃうみたいね」

チヨコ「くそ」。待つのも面倒だけど、上りのときに乗るしかないか」

ミコ「下りでもタイミングを上手く合わせれば乗れるみたいですけどね」

チヨコ「ま、難なく突破！」

カイコ「難なくだったかは、ちょっと疑問だけど」

チヨコ「うるさいっての！　ともかく、4面まで来たぞ！」

カイコ「とりあえず、最終面ね」

チヨコ「……とりあえず……？」

カイコ「ふふっ、ノーコメントで」

ミコ「なんか、怖いですね……」

チヨコ「なんとなく、予想がついてしまっただけ……」

カイコ「気にしないで先に進みなさいな」

チヨコ「わかってるよ！　操作に慣れたからか、かなり楽に進めるようになっただけ」

ミコ「ランダムアイテムで1UPがいくつか出てましたから、残り人数も随分と増えてますね」

チヨコ「ステージクリアごとに1人増えるってのもあったしな！」

カイコ「つまらないわ」。ファミコン本体に振動を与えようかしら」

チヨコ「ちよっ、やめてくれ！　ここで止まったら、さすがに嫌だ！」

ミコ「鍵の上から、コウモリがフンを落としてきてますね」

チヨコ「ふっ。こんな問題ないぜ！」

（上手くタイミングを見計らってジャンプ、
鍵を取ってすぐジャンプでハシゴに戻る）

カイコ・ミコ「おお〜！」

チヨコ「ほんとに、楽勝になってきたぜ！」

カイコ「フラッシュで倒すって手もあったんだけどね〜」

チヨコ「倒したあとに落下してくる変みたいなのにあたってもミスになるなら、

力技で抜けたって変わりないぜ！」

——そして——

チヨコ「どうやら、すぐそこでゴールみたいだな！」

カイコ「そうね〜」

チヨコ「ただ、なんかハシゴの位置と床の位置が微妙な感じだな…。

まあ、ジャンプ！ …… くっ、失敗か！」

カイコ「残念でした」

ミコ「落下してしまいましたね」

チヨコ「ま、もう1度！ …… 今度は成功！」

ミコ「扉を開けて、中に侵入ですね」

チヨコ「おっ！ これは…… 宝の山か？」

カイコ「ふふっ、無事クリア、おめでとう！」

チヨコ「やったぜ！ 結構長かったけど、確かに慣れれば問題ないな！」

カイコ「ちなみに、2周目以降もあるけどね」

チヨコ「くっ……！ さすがにそれは、やめてくれ！」

ミコ「どうしてですか。ミコはグラディウスを6周クリアまでやらされたんですから、

チヨコ姉様だってもっと先まで——」

カイコ「ふふっ、仕方がないから、ここまでで許してあげるわよ。
本当は2周目以降だと鍵の取り方なんかも変わってきて、

いろいろと楽しくなってくるみたいだね。」

チヨコ「これ以上続けたら、神経がおかしくなってくるぜ……」

カイコ「あら、慣れたから問題なかったんじゃないの？」

ミコ「……ミコとしては少々納得がいきませんが……」

チヨコ「ミコよりもオレのほうが、カイコ姉に愛されてるってことだな！」

カイコ「そんなことないわよ？」

チヨコ「なんかより、ミコのほうがよっぽど愛してるわ。だからこそ、愛のムチだったって感じがしら。」

ミコ「そ……そんな愛、ほしくないです！」

チヨコ「オレ、カイコ姉に愛されてないのか……」

カイコ「……そんなことでチヨコがいじけるとは思わなかったわ。意外と寂しがり屋なのね、チヨコって。もちろん、チヨコだって愛してるわよ？」

チヨコ「カイコ姉……」

カイコ「というわけだから、今日は愛情がいっぱいつまった私の創作料理を、

たっぷりとご堪能あれ！」

ミコ「ちょ……カイコ姉様、創作料理とは名ばかりの実験料理は――

「」

カイコ「具材とか調味料とか、いつさい秘密だから、お楽しみに♪
ふふっ、どれくらい痺れてくれるかしら……」(ぼそっ)

チヨコ「今、痺れるとか言ったか！？ なにを食わせる気だ！」

カイコ「うふふっ、楽しい食卓になるわね♪ 私は普通の食事を
食べるけど」。

ふたりはしつかり、私の愛を受け取ってねっ！

チヨコ・ミコ「断固拒否する(します)！」

今日はスペランカーで遊んだのか。

1周目だけとはいえ、よくまあ、クリアまで行ったものだな。
俺が買った頃は、せつかくお小遣いを貯めて買ったというのに、
早々に諦めてしまったんだっただか……。

慎重に進むなんて、俺の性格では無理だったただけなのだが。

チヨコも成長しているんだな。

カイコは意地悪さが成長していそうな気もするが……。

実際、カイコはしっかりと創作料理を作り始めているし……。

もっとも、さっきの言葉とは違って、自分も一緒に食べるつもり
のようだが。

さすがに痺れるような料理を作るといふのは冗談だったみたいだな。

……どうやったら、痺れる料理が作れるのかは謎だが。

【ゲーム解説】

「スペランカー」

対応ハード：ファミコン 発売元：アイレム 発売日：1985年
12月7日

サイドビューのアクションゲーム。探検家を操作して、洞窟の奥を目指す。

元は海外のゲームで、それをアイレムがライセンスを受けて発売した。

どうやら元のゲームではファミコン版ほどひ弱な主人公ではなかった模様。

本編で書いていない要素としては、ジャンプで出現する隠しアイテムや、

爆弾で出現するダイヤモンドなどもある。

第5話 スーパーゼビウス ガンプの謎

カイコ「今日はミコの担当ね。スーパーゼビウスで行きましょう〜
！」

ミコ「……初代のゼビウスじゃなくて、そっちなんですね」

カイコ「初代ゼビウスじゃ、あまりネタにならなそうだなもの〜。
バキュラに弾を256発撃ち込むと倒せるくらいかしら〜」

チヨコ「それデマだし、だいいち物理的に無理だし！」

ミコ「バキュラって確か、金属の板みたいな敵ですよね」

チヨコ「そうそう、倒せないやつな！」

カイコ「なぜか名前だけはすごく有名っていう、アレね〜」

ミコ「それにしても……バキュラだなんて、怪獣みたいな名前です」

カイコ「ま、ともかく始めましょう〜！ はい、カセットはこれね」

チヨコ「おっ！ ゴールドのカセット！ ……ってことは、レアものか！？」

カイコ「残念ながら、これは全部ゴールドなのよ〜」

ゴールドのがレアといったら、キン肉マンだったかしら〜」

ミコ「ですが、金色っていうのは、ちょっと燃えますね」

カイコ「あら、ミコは折り紙や色鉛筆の金や銀を大切にしているタイプなのね」

チヨコ「お子様だな！」

ミコ「べ……べつにそういうわけでは……」。

それに色鉛筆の金や銀って、使いどころがなくて使わないだけじゃないですか？」

カイコ「それは言えるかもしれないわね」

チヨコ「それ以前に、色鉛筆なんて使わないぜ！」

カイコ「チヨコはお絵描きするタイプには見えないわね」

ミコ「見えないです」

チヨコ「なんだかバカにされてるみたいで嫌だな……」

ミコ「まあ、ゲームスタートです。シューティングですから、楽勝ですよ」

チヨコ「と余裕をぶっこいてられるのも、今のうちだけかもただかな」

ミコ「……えっ？」

カイコ「ふふっ、クリアするために条件があったりするのよね」

ミコ「そ……そんなの、シューティングにあるまじきシステムです！」

チヨコ「確かに、爽快感を求めるとかだったら不要だよな」

カイコ「きつと、いろいろと試行錯誤していた時期なのよ」

チヨコ「ま、さほど複雑な条件はないから安心しろ！ ナビもしてやるから！」

ミコ「わかりました、お願いします。

………わっ、いきなりワープしましたよ!？」

チヨコ「雲の中に入ったからだな。

4つのうちのどれかが、ランダムでワープになる」

カイコ「普通に左右に移動してたら、大抵ワープしそうだけどね」

ミコ「ワープしても、空のステージなんですネ。

おや？ なにか戦闘機みたいなのが出てきましたよ？」

カイコ「ファントムね。左右の丸っこいやつに捕まってるみたいよ」。

ちなみに、自分の操作してる戦闘機はソルバルウっていう名前よ」

チヨコ「さあ、ミコ！ 丸っこいのを倒して、合体するんだ！」

ミコ「合体！ ロボットものみたいです！」

カイコ「合体って、いいわよね」

チヨコ「……カイコ姉が言うと、なんだかエロいな」

カイコ「ちょっ！？ そういうこと言わないの」

ミコ「エロって、どういうことですか……？」

カイコ「ミコは気にしないで」

チヨコ「お子様だからな！」

ミコ「なんだか仲間外れにされてしまいました……」（しょぼん）

カイコ「ほ……ほら！ それより、下から味方機が来たわよ！」

チヨコ「アイテムを3つ出すぞ！」

ミコ「これって、さっき合体したファントムってやつですよね」

チヨコ「合体したお礼に、アイテムをくれるってことだな！」

カイコ「せめて助けたお礼って言って」

ミコ「青いアイテムを取ったら、後ろにも撃てるようになりました」

チヨコ「3つ同時に取ることもできるんだけどな！」

カイコ「解説すると、黒がバリア、黄色がワイドブラスター、青がバックザッパーね」

ミコ「ブラスターというのが地上への攻撃で、

ザッパーというのが空中への攻撃ですね」

チヨコ「ま、次に出てきたときは3つ同時に狙ってみな！」

カイコ「ファントムにぶつくと死んじゃうけどね」

ミコ「味方なのに敵なんですネ……」

チヨコ「そりゃ、味方だって戦闘機同士でぶつかったら、墜落するのは当たり前だろ！」

カイコ「もっとも、ファントムのほうは無傷で飛んでいくんだけどね」

ミコ「ソルバルウ、貧弱です」

カイコ「さて、お待ちかね、アンドアジェネシスよ」

チヨコ「べつに待ってないけどな」

ミコ「ボスですね！ わくわくします！」

チヨコ「ま、弱いけどな」

ミコ「ブラスター1発ですか……」

カイコ「ふふつ、初代ゼビウスだとそれだけだけど、このゲームは違うのよ」

ミコ「あつ、ソルバルウの中に……！」

チヨコ「というわけで、アンドアジェネシス内部だ！」

カイコ「ここは、赤く光ってる地上物を全部倒せばOKよ」

ミコ「ふむ。楽勝ですね！」

チヨコ「ほんとに、さくつとクリアしたな。

次は砂漠の低空飛行面だ。ザッパーだけしか使えない」

ミコ「ステージごとに武器にも制限があるんですね」

カイコ「ここは、四角くて右下に影のある敵を全滅させるのが条件よ」

チヨコ「ソルみたいなやつだな！」

ミコ「ソル……？」

チヨコ「あ、説明してなかったな。地上物がないのに照準の部分が

光る場所があつて、

そこにブラスターを撃ち込むと、ソルっていう隠れキャラが出てくるんだ。

それを倒すと、ボーナス得点が入る」

カイコ「得点だけだから、無理に探す必要もないけどね」

ミコ「なるほど……」

チヨコ「さらに、1UPするスペシャルフラッグっていうのもあるけど、

こっちは照準が光ったりもしないんだ」

ミコ「どうやって探せというんですか……」

カイコ「場所を覚えるしかないわね」。

しかも、固定の場所じゃなくて、横1ラインのどこか、つて感じだったはず」

ミコ「面倒ですね」

チヨコ「ま、あまり気にしないでいいだろ！

バリアもあるし、得点でも増えるし、ミコはシューティング得意だし！

ゲームオーバーになんて、なるはずないよな！」

ミコ「なんだかちょっと、プレッシャーです……」

チヨコ「次は洞窟面だ。ここは砂漠と逆で、プラスターしか使えない」

ミコ「とっても地味です」

カイコ「まあ、そうね」。

「ここは壊せる壁があつて、まずはその先に進んだほうがいいわ」

チヨコ「岩を壊しながら進んでいくと、よくわからないアイテムが出現する。」

それを取つて、壁を通り抜ける前の通路に戻つて進めばクリアだ」

ミコ「壁がある分、移動範囲が狭いのも、ちょっと厄介ですね」

カイコ「弾を大量に出してくる敵も厄介ね」

ミコ「ま、ミコの手にかかればこんな攻撃、恐るるに足らずですが」

カイコ「頼もしいわね」。チヨコみたいに凡ミスもしないし」

チヨコ「うっさい!」

ミコ「というわけで、さくつとクリアです」

チヨコ「次の面は、途中でシオナイトっていう菱形を左右に切つたような敵が来る。」

画面中央に向かって飛んできて合体するから、その合体の
あいだに割り込んで、

サンドイッチ状態になるのがクリア条件だ」

ミコ「サンドイッチ！ 食べたいです！」

カイコ「どっちかっていうと、自分が食べられてるような感じだけ
どね」

チヨコ「次の面は問題なしだな。

ラストでスクロールが止まるから、その地上物を全滅さ
せればOK」

カイコ「スクロールが止まる前に、ある程度倒しておくといいわね
」

ミコ「楽勝ですね」

チヨコ「さくさく行くぞ！

次は洞窟っぽい感じだけど、地上絵の溝を進むステージら
しいな！」

カイコ「……ナスカの地上絵って、べつに深く掘ってあるわけじゃ
ないんじゃない？」

チヨコ「ナスカだとはどこにも書いてない！」

ミコ「そうです。細かいことは言いつこなしです」

カイコ「はいはい、そうね」。ミコ、その言い方、気に入ってきて

るわね？」

チヨコ「この面の最後は、出口が閉まつてるけど、ブラスター5発当てればOKだ！」

ミコ「連射ブラスターが欲しいです」

チヨコ「無い物は仕方ないだろ」

チヨコ「次は基地内だな。ピラミッドみたいな敵を全部壊す必要がある」

カイコ「3発当てないとダメだから、早めに行動するべきね」

ミコ「結構敵の攻撃も激しくなってますね」

チヨコ「そう言いながら、ノーミスで進んでるのはすごいな！」

カイコ「パワーアップでバリアを毎回取ってるから、バリアの数も増えてるものね」

チヨコ「最大255個分までバリアをストックできるらしいぜ！」

ミコ「……それって、可能なんですか？」

カイコ「無理じゃないかしら。おそらく、データを1バイトで表

しているから、

理論上は可能、ってことなんだと思うわ」

ミコ「１バイト……ですか」

チヨコ「ミコには難しい話かもだな！……オレもわからないけど！」

ミコ「それはともかく、出口ですね」

チヨコ「おっと、そこには入っちゃダメだ！」

ミコ「……えっ？」

チヨコ「そのまま通過して進んでいくと、別の出口がある。そっちに進むんだ」

カイコ「そうすると、いいことがあるのよ」

ミコ「プレゼントですか！？ わくわく」

チヨコ「まあ、ある意味プレゼントにはなるか」

——そして——

ミコ「なんか、雰囲気が変わりました。BGMもちょっとまともになってます」

チヨコ「一応、隠しステージって扱いになってるな！」

カイコ「そして、待望のプレゼントがあるわよー！」

ミコ「おおっ、なんですか!？」

カイコ「ふふっ、白くて四角いものよ！」

ミコ「ケーキですかっ!？」

チヨコ「残念、味方機だ！」

ミコ「ええ〜? 当たるとミスになるといっ……」

カイコ「ファントムとは違うのよ。ほら早く! 早く合体して〜」

チヨコ「やっぱちょっとエロい……」

ミコ「??? ともかく、合体です」

カイコ「おめでとぅ。スーパーザッパーよ〜」

ミコ「ザッパーの音が重たい感じになりました!」

チヨコ「敵を倒した音は軽いままだけだな」

カイコ「確かにこのゲーム、空中物を倒した音、チリチリって感じで軽いわよね〜」

ミコ「また基地に出ましたよ」

チヨコ「うむ。このゲーム、結構長いんだ」

カイコ「ここは文字の書いてある地上物が3種類あるから、

それぞれ1つ以上倒すのよ」

チヨコ「ただ、なにも書いてないのを倒してしまうとリセットされるから注意な!」

ミコ「リセットボタンが押されるんですか!? それは怖いです…

…」

チヨコ「いや、そうじゃなくて……」

ミコ「わかってますよ。……難なくクリアです」

チヨコ「次の面はまた、途中で出てくるシオナイトと合体だ!」

カイコ「……私、合体関連には口を挟まないことにしておくわ」

チヨコ「ちっ」

ミコ「???」

チヨコ「まあ、合体したまま次の面に行くと、途中で爆発して4つの粒になる。

ジェミニっていうらしいけどな。それを1つ以上残して進めばクリアだ」

カイコ「ジェミニは画面の端に出ると消えちゃうから注意してね」

チヨコ「残った分はバリアになるから、最大で4つバリアを増やせるチャンスだな！」

ミコ「自機の周囲を回る感じですけど、結構大きく動いたりしますね」

チヨコ「ま、1つ以上残ってればいいし、あまり気にせず行けばいいさ！」

カイコ「そして次の面では、待望のボスが待ってるわよ」

チヨコ「アンドアジェネシスのパワーアップ版だな！」

カイコ「ガウルダークジェネシスっていう名前らしいわ。砲台が8個になって、

しかもコアの部分にはシャッターがついて、開いたり閉じたりするの」

ミコ「……なかなか、コアに当たってくれませんね」

チヨコ「開いてるときに数初当てればクリアなのかな？」

カイコ「確かに、アンドアジェネシスよりずっとパワーアップしてるわね」

ミコ「とはいえ、攻撃は大差ないですし、大したボスではないですね」

チヨコ「今度は火山面だな！」

ミコ「激しい爆発とかは、しないんですね」

カイコ「一応微妙に爆発して、岩かなにかを飛ばしてくるけどね」

チヨコ「この面は火山の全滅がクリア条件だ。全滅させたあとはループになるから、

一番最初の火山の中に入るとクリアになるぜ！」

カイコ「バキュラも出てくるけど、スーパージッパーがあると倒せるから問題なしね」

ミコ「はい。とってもぬるいです」

チヨコ「次は最終面の一手前だけあって、そんなにぬるくはないはずだぜ！」

ミコ「ほほう」

チヨコ「下から出てくる半月型の敵を全部倒すのがクリア条件だ。ただし……」

ミコ「ただし……？」

チヨコ「1つでも逃すと、4つ前のステージまで戻される！」

ミコ「うわっ、かなりのペナルティーですね！」

カイコ「しかも、攻撃も随分激しくなってるわね」

ミコ「地上物がたくさん弾を飛ばしてくるので、すごく嫌ですね」

チヨコ「バリアを犠牲にしても、半月型のは逃さないようにな！」

ミコ「わかってます！ あっ、クリアしましたか？」

カイコ「そうね。短めで助かったわね」

（というわけで、最終面へ）

チヨコ「おっ、BGMが結構いい感じだな！」

ミコ「そうですね。確か昔、父様もこの曲は好きだと言っていました」

カイコ「よく覚えてるわね。でも、確かに悪くないわ。

主旋律とドラム代わりのリズム音って言えばいいのかしら、
たった2音しか使ってないみたいなの」

チヨコ「それはともかく、背景が蜂の巣っぽい感じだな」

ミコ「美味しいハチミツがいただけるでしょうか」

チヨコ「絶対ないな！」

カイコ「会話しながらなのに、上手く弾を避けるわよね、ミコは」

ミコ「楽勝です」

チヨコ「カイコ姉と違って反射神経いいからな！」

カイコ「どうせ私はトロいわよ。……夕飯、トロにしようかしら」

チヨコ「食欲魔人……」（ぼそっ）

カイコ「なんですって〜!？」

ミコ「カイコ姉様、耳の反応は異常にいいですよね」

（騒ぎながらも、ラスボス戦へ）

チヨコ「こいつは4つに分裂して、8の字を描くように移動するぞ。

ブラスターで倒すんだけど、速いからなかなか大変だぜ！」

ミコ「4つに分裂しましたね。三角形の白いやつです」

カイコ「ショートケーキね〜！」

チヨコ「やっぱり食欲魔人じゃん」

ミコ「攻撃もそれなりに激しいですが……ミコの敵ではないです！」

チヨコ「お〜！」

カイコ「無事クリアね〜、おめでと〜！」

ミコ「この程度の難易度なら、ミコにとっては朝飯前です」

チヨコ「実際には夕飯前だけだな！」

カイコ「寒いわ〜」

チヨコ「うっさい！

そうそう、エンディングでスタートボタンを押すと、2周目が始まるぜ！」

カイコ「そのまま待つてると、ゲームオーバーになるけどね〜」

ミコ「ふむふむ。

……変な脳みそみたいなのが逃げていって、ゲームオーバーになりましたね」

チヨコ「……2周目までやりたくなくて、わざと放置したな……？」

ミコ「なんのことやら」

カイコ「それじゃあ、夕飯にしましょうか」

チヨコ「待ってました！ トロだよな！？」

カイコ「そんなの買ってきてないわよ。軽いけど、サンドイッチと、はちみつレモンで」

チヨコ「おいおい、夕飯だぞ？ 軽すぎないか？」

ミコ「ミコはそれでいいです。サンドイッチもはちみつレモンも大好きですし」

カイコ「あら、ミコはやっぱりいい子ね」

チヨコ「ま、仕方ないか。オレもそれでいいぜ」

カイコ「食後のデザートに、ショートケーキもあるけど……。
食欲魔人じゃないチヨコは、いらなのよね？」

チヨコ「ぐっ……！」

カイコ「ふふっ、冗談よ」

ふむふむ。今回はスーパーゼビウスか。

初代と比べると、クリアするのに条件があつたりするシステムが災

いしたのもあって、
あまり評価の不高くないゲームだったが……。
個人的にはそれほど悪いとは思わなかったかな。

ミコも言っていたが、最終面のBGMはとても耳に残りやすい曲だと思う。

それ以外、これといった印象も残っていない気もするが……。

それはともかく、夕食にサンドイッチって、今日の夕飯は手抜きなのか？

まあ、毎日頑張って料理をしているわけだから、たまにはそういう日があってもいいか。

【ゲーム解説】

「スーパーゼビウス ガンプの謎」

対応ハード：ファミコン 発売元：ナムコ 発売日：1986年9月19日

縦スクロールシューティングの名作、ゼビウスの続編。
謎解き要素があり、クリアの条件を満たさないと、同じステージが

ループし、

4周ループまでにクリアできないと墜落して1ミスとなる。

さらに、スーパーザッパを取っていた場合は、それもなくなってしまう。

ちなみに、バキュラはスーパーザッパじゃなくても破壊可能。
なお、ラスボスのコードネームはチーズケーキ。

第6話 ポートピア連続殺人事件

チヨコ「さて、今回はカイコ姉の担当だな!」

カイコ「また大変そうなゲームを指定してくるんじゃないの?」

ミコ「……前回のたけしの挑戦状が、随分とトラウマになってるみたいですね」

チヨコ「ナビだってしっかりやってやったのに……」

カイコ「余計なことまでいろいろとさせたじゃないの。」

それに、最初は私が苦しむのを黙って見てたくせに」

チヨコ「まあ、ゲームなんだから、ナビ任せにしちゃダメだろ!」

カイコ「それはそうだけど」

ミコ「カイコ姉様、ゲームは楽しく遊ぶものです。一緒に楽しみましょう」

カイコ「……どうせミコだって、私の苦しむ姿を楽しみにしてるだけでしょう?」

ミコ「ああ、なんだかカイコ姉様がマイナス思考全開になってしまってます」

チヨコ「誰のせいだろうな」

カイコ「チヨコに決まってるでしょ、もう！」

チヨコ「へっへっへ、はてさて、なんのことやら？」

ミコ「チヨコ姉様、話が進みません。早く始めましょう」

チヨコ「それもそうだな。今回はコレをやってみようと思う」

カイコ「……あら」

ミコ「安堵の表情を浮かべてますね」

チヨコ「有名なゲームだからな！」

ミコ「ポートピア連続殺人事件ですね」

カイコ「有名すぎかもしれないけど。私、犯人知っちゃってるわよ」
「？」

チヨコ「ゲームをやったことがなくても犯人だけは知っている率ナンバー1だしな！」

ミコ「ナンバーワンというか、他にないですよ、そんなの」

カイコ「アドベンチャーゲームよね。でも、この頃のゲームっていうことは……」

チヨコ「もちろん、適当なコマンド総当たり作戦でクリアできるゲームじゃないな。」

しかも、セーブがないのは当然として、パスワードでのコ

ンティニューもない」

ミコ「スタートしたら、クリアするまで続けないとエンディングは見られないんですね」

カイコ「う……鬼っぽいわ……」

ミコ「とすると、ナビが必要っていうことですね」

チヨコ「ネットで調べると、最短10分程度でクリアできるって話だけだな！」

カイコ「あら、それなら大丈夫そうかも？」

チヨコ「ふっふっふ、だったらカイコ姉、自力クリアを目指してるか？」

カイコ「う……」

ミコ「前回の嫌な記憶が、頭をよぎってますね」

チヨコ「ま、オレとしてはどっちでもいいんだけどな！

カイコ姉、どうする？」（にたあ）

カイコ「そのニタニタ顔が、とっても嫌だわ……」。

でも、わかってるわよ。ナビ、お願いします」

チヨコ「ウンコ座りで！」

カイコ「それはもう前回やったわよ！」

……と、ところで、あの写真、ちゃんと消してくれた？」

チヨコ「はてさて、なんのことやら……」

カイコ「む……」

ミコ「まあまあ。あとでミコが消しておきますから」

チヨコ「おいつ！ 人のケータイをいじるのは邪道だ！」

カイコ「恥ずかしい写真で人を脅すのは、邪道じゃないっていうの
く？」

チヨコ「あゝ、まあ、その、なんだ。ごちゃごちゃ言っでないで、
早く始めたまえ！」

カイコ「はいはい、わかったわよ」

チヨコ「次にどこに行けばいいとか、そういったナビはするけど、
ある程度は自分でコマンドを試したりすること！」

ミコ「さすがにアドベンチャーゲームで全部ナビしてしまっては、
ゲームじゃなくなってしまうもんね」

カイコ「わかったわ。今の私はチヨコには逆らえない立場だものね
」

チヨコ「へっへっへ、なんだかい気分だぜ！」

ミコ「そんなふうに調子に乗ってると……いえ、いいです」

カイコ「それじゃあ、ゲームスタートね」

チヨコ「いきなり登場、ヤス！」

カイコ「真野康彦って名前だったのね」

チヨコ「最初にしか出てこないんじゃないか？ こいつのフルネーム」

ミコ「どうでもいいですが、間の抜けた顔してますね」

カイコ「そんなこと言ったらかわいそうよ」

チヨコ「そうだぞ、そんなオヤジギャグっぽいこと言っちゃダメだ」

ミコ「えっ？」

チヨコ「『まの』って名字だから、『まの』抜けた顔って言ったんだろ？」

カイコ「あら、そうだったのね。気づかなかったわ」

ミコ「ちよっ！？ 違いますよ！ ミコも気づきませんでした」

カイコ「とすると……オヤジはチヨコってことで」

ミコ「異議なし」

チヨコ「おいっ！ 意義あるぞ！」

カイコ「まあ、とにかく進めるわよ。

……でもどうしよう。コマンド、結構多いわね」

チヨコ「しかもBボタンを押せば、もう1ページ分のコマンドが」

カイコ「あら、ほんと。……捜査をやめるなんてコマンドもあるわよ？」

ミコ「普通のゲームでしたら、やめたらパスワードが出てコンティニューができそう

なものですけどね」

チヨコ「最初に言ったとおり、そんなものはない！」

カイコ「何度も本当にやめるのか？ って尋ねられるわ。やめられはしないってことね」

チヨコ「とりあえずは聞き込みからだな」

カイコ「平田って人が事件当日から行方不明なのね。

……事件ってなにかしら？」

チヨコ「ゲームのオープニングでの説明とか、全然ないんだな。

説明書には載ってるけど、ストーリーとしては、

サラ金会社の社長、山川耕造が自殺したという内容だな」

ミコ「その耕造は、書斎で死んでいたのですが、鍵がかかっていました。そうです。」

ただ、主人公は自殺だということに疑いを持っていますが」

カイコ「つまり、密室殺人の可能性があるってことね」

チヨコ「その謎をあばくのが目的ってわけだな！」

ミコ「あとは、人調べろで、登場人物の職業とか経歴とかアリバイなんかを

調べられますね」

チヨコ「ひととおり調べたら、場所移動で山川の屋敷に行くぞ！」

チヨコ「さて、家の前だけど……ここにはなにかがある！」

カイコ「なにかってなによ？」

チヨコ「ちよつと自力で探してみな！」

ミコ「意地悪ですね」

チヨコ「これくらい自力でやってもいいだろ！」

なにかあるって言うてるわけだし、探せと言ってるんだから、

ヒントとしては大きすぎるくらいだぜ！」

カイコ「なにか調べるで、虫眼鏡を選ぶと、調べる場所を選べるのね。」

ミコ「実際に虫眼鏡型のカーソルを操作して、調べる場所を指定するんですね」

カイコ「ちょっと面倒ね。ドアにはなにもなし、窓もないわね。植え込みにもなし……って、うゝ、なにもないわよ？」

チヨコ「これくらいで音を上げてどうする！」

カイコ「そんなこと言われても」

ミコ「カイコ姉様、玄関のドアの右下辺りですよ」

カイコ「あつ、安っぽい指輪を見つけたわ」

チヨコ「ミコが裏切った！」

ミコ「ふっふっふ。

チヨコ姉様に任せていては、意地悪ばかりで日が暮れてしまいますからね」

カイコ「やっぱり、ミコはいい子ね！」

ミコ「今日のデザートは多めをお願いします」

カイコ「もちろんよ！」

チヨコ「うわっ、そんなんアリかよ！」

ミコ「家の中に入りましょう。書斎、つまりは耕造が死んでいた場所です」

カイコ「そんな場所、調べたくないわね」

チヨコ「刑事がそんなこと言ってどうする！

さて、自力で……と言いたいところだけど、結構面倒そうだな」

カイコ「じゃあ、ナビを……」

チヨコ「うーん、どうすっかなあ？」（ニヤニヤ）

ミコ「ミコがお教えします」

チヨコ「あっ、ミコ、また裏切るか！」

ミコ「ミコは夕飯を確保したいのです」

カイコ「すでに空腹なのね、ミコ」

（部屋を調べて証拠品3点ゲット。

さらに隣の応接室で証拠品のライターをゲット。

また、壁のスイッチを発見して押した）

チヨコ「で、書斎に戻ると……」

カイコ「あつ、床に穴が開いてるわ」

ミコ「階段って書いてありますけどね」

チヨコ「そこを下りると、広大な地下迷宮での冒険が始まるぜ!」

ミコ「チヨコ姉様、嘘はいけません」

カイコ「……3Dダンジョン系って苦手なのよね……」

ミコ「迷ってますね」

カイコ「だって、一方通行の通路なんかまであるんだもの」

チヨコ「ほら、広大な地下迷宮だろ!」

ミコ「実際は広大ではないですけどね」

カイコ「うつ……」

チヨコ「まあ、あまり迷われても夕飯が遠のくだけか。

マップも載ってたから見せてやるよ」

カイコ「ありがとう」

（地下迷路の奥にある金庫まで到達）

ミコ「借用書がありますね」

カイコ「平田に300万円貸して、川村っていう人にも何回か貸していたみたいね」

チヨコ「平田つてのは行方不明になってる奴だな！」

カイコ「川村つて人は、これまでには出てきてないわよね」

チヨコ「ま、とりあえず捜査本部に戻って事情聴取タイムだ！」

129

チヨコ「そんじゃ、呼べる人を順番に呼んでいこう！」

ミコ「おや、タレコミ情報が」

カイコ「平田が娘の由貴子に、京都に行きたいと話していた……と」

チヨコ「ま、心に留めておいて、まずは事情聴取だ！」

ミコ「カツ丼が必要です！」

カイコ「それは、犯人を追い込むときじゃない？」

チヨコ「システムの、カツ丼を出したりはできないけどな」

カイコ「取り調べで実際にカツ丼を出したりなんてしないみたいだけどね。」

昔は本当にあつたのかもしれないけど」

チヨコ「ともかく、呼べるのは4人だな」

カイコ「まずは小宮にしましょう」

チヨコ「呼んだらまずは、なにかとれで、写真を撮る」

カイコ「取る、じゃなくて、撮るってのもありなのね」

ミコ「平仮名表記だからこそできる荒業ですね！」

チヨコ「小宮はいろいろ訊いても答えないから、叩け！」

カイコ「ひどいわね……」

チヨコ「叩くコマンドで、トンカチのマークで小宮の頭を一撃だ！」

カイコ「トンカチで叩くなんて……下手したら死んじゃうわよ？」

ミコ「位置を決めるカーソルなだけで、実際にトンカチで叩くわけじゃないですよ」

（そして文江、俊之、由貴子の順に呼び出す）

カイコ「俊之は指輪を由貴子にあげたものって言っていたのに、
由貴子はもらってないって言っていたわね」

ミコ「俊之、怪しいですね」

チヨコ「まさに不良ですって感じの見た目だしな！」

カイコ「今どきこんなあからさまな不良なんていないわよね。
そういった意味でも怪しいわ」

チヨコ「今どきのゲームじゃないけどな。しかもこいつ、設定では
29歳か……」

（その後、港と俊之の部屋に行き、メモを見つけて電話、
港で例の物を渡すという男の話を聞ける）

チヨコ「じゃあ、港に行ってみよう！」

カイコ「あつ、ほんとにいたわ」

ミコ「バカですね。相手が刑事だとも知らずに」

チヨコ「話しかけてきた男を逮捕だ！」

カイコ「逮捕するってコマンドがあるっていうのも、すごいわよね

」

（続いて、重要参考人として俊之を呼び出し、
小宮と同じように叩いて麻薬密売を自白させ逮捕）

チヨコ「また殴って解決したな！」

カイコ「トンカチ最強ね」

ミコ「トンカチで殴ってはいないですってば！」

（タレコミのあった京都へ行ってみるも、有力情報はなし）

チヨコ「で、捜査本部に戻る」

カイコ「由貴子からの情報が届いてるわね」。

平田のポケットから電話番号のメモが見つかった、だって

ミコ「かけてみましょう」

カイコ「電話かけるコマンドね。あら？ 現在使われておりません、
って出るわね」

チヨコ「市内じゃないのかもな！」

ミコ「104です、姉様！」

カイコ「なるほど、京都の番号ってことね。

104で京都の市外局番は075って、教えてもらったわ
」

（電話してみると、寺田屋旅館につながり、

平田はチェックアウト後、阿弥陀ヶ峰に向かったと聞ける）

チヨコ「よし！ 京都へ行こう！」

カイコ「旅行だったら嬉しいんだけどね」

ミコ「捜査ですからね……」

チヨコ「しかも……」

ミコ「うわ……」

カイコ「平田……首を吊ってるわ……」

チヨコ「木の根もと辺りを調べると書き置きがあるぞ」

カイコ「借金苦で自殺……」

チヨコ「ところが！」

カイコ「えっ？」

チヨコ「捜査本部に戻ると進展が！」

ミコ「検死結果が出ましたね。平田は耕造よりも先に死んでいた……？」

（由貴子呼び出し、父親が自殺したことを告げる。
そして、由貴子が事件当日、新開地にいたと聞く）

カイコ「新開地……」（びくっ）

チヨコ「ふっふっふ、次の目的地は新開地だ！」

さあ、カイコ姉！ 雨の新開地を大声で歌うんだ！」

カイコ「それは別ゲームよー！ もう私は歌わないわー！」

ミコ「カイコ姉様の美声、ミコはもう1度聴きたいです」

カイコ「褒めたって、絶対に歌わないんだからー！」

（新開地のスナックパルで聞き込み。
耕造の屋敷で見つけたライターが川村という人の持ち物だと

わかる)

カイコ「川村って、借用書に名前のあった人ね」

チヨコ「さらに雨の新開地で歌いながら聞き込めば、

新劇のおこいと川村が親しかったとの情報が得られるぞ！」

カイコ「『雨の』はいらないし、歌いながらってのは不要でしょう！」

ミコ「まあまあ、カイコ姉様。ともかく歌ってください」

カイコ「歌わないってば！」

(捜査本部に戻り、おこいを事情聴取。川村と耕造が詐欺仲間だったと聞く。

パルのマスターにも話を聞いてみるが、とくに情報は得られない)

チヨコ「捜査本部へ戻ろう」

カイコ「今度は、おこいからのタレコミね。川村がすみれ荘にいる、だそうよ」

ミコ「行ってみましょう」

カイコ「……なんとなく、嫌な予感が……」

チヨコ「カイコ姉、鋭いな！」

ミコ「ほんとです……。川村が死んでいます……」

チヨコ「川村が犯人だったことで、捜査やめるを選んでくださ
いって

ヤスが言うてくるな」

ミコ「平田が死んだときにも同じようなことを言っていましたね」

カイコ「どうせここで捜査をやめたらゲームオーバーでしょう？」

とにかく、さっきタレコミしてきたおこいが怪しいわね」

チヨコ「事情聴取だ！」

（おこいの事情聴取で、川村が、耕造と組んでやった洲本の沢
木産業の詐欺が

一番大きな仕事だったと話していたとの情報を得る。

また、耕造の秘書の名前が沢本文江という名前だという話も
聞く）

チヨコ「次は港から、淡路島の洲本へ行くんだ！」

カイコ「淡路島なのね」

（洲本での聞き込みで、文江には離れ離れになった兄がいるが、

く。

別の家にもらわれていったため姓は変わっているはずだと聞
る。また、その兄は肩に蝶のアザのある男だったという話も聞け
る。

捜査本部に戻ると、鑑識から川村の部屋で発見されたメモが
届く）

チヨコ「というわけで、お待ちかねの地下迷宮再びだ！」

カイコ「べつに待ってないわ」

（メモどおりに進んだあたかもチヨコがしっかりナビをしたので、
お待ちかねの迷宮はさくつと通過）

カイコ「壁を叩いてみたら、他の場所とは音が違ってた」

チヨコ「突っ込め！」

カイコ「なんでやねん！」（バシッ！）

チヨコ「いや、そのツツ」ミではなく……」

カイコ「わかってるわよ」

ミコ「ヤスが壁に体当たりしたことになるんですね」

チヨコ「そして壁の中には部屋が！」

カイコ「隠し部屋になってるのね。怪しいわ」

チヨコ「ここでは、大声で叫べば壁の一部が開く。

ということとは……言わなくてもわかるな？」

（ミコ、無言でカイコに2コンを渡す）

カイコ「ええ？」

チヨコ「さあ、歌え！」

ミコ「わ、頑張つて歌ってください！」（パチパチパチ）

カイコ「歌う必要なんてないでしょ！ マイクに向かって叫べばいいのね。

す……。チヨコのバカ……………！」

チヨコ「うわっ、ひどっ！」

カイコ「……なにも起きないわよ？」

チヨコ「マイクで叫ぶつての、嘘だしな！」

カイコ「うわっ、ひどいっ！」

ミコ「カイコ姉様、すごい大声で叫んでました」

カイコ「また隣のおばさんに文句を言われちゃうかも……」（涙目）

ミコ「前回の歌のときは、完全に聞こえていたみたいでしたしね」

カイコ「歌ってもいいけど、もう少し声を落としてねって言われちゃったわ」

チヨコ「もっとも、叫ぶつてのが正解なのは確かなんだけどな。

コマンドで、呼べ、を選べば叫ぶぞ！」

カイコ「呼ぶつてコマンドなのに叫ぶつて……全然違うじゃない……」

ミコ「文句を言っても仕方ありませんよ」

カイコ「そうね。ヤスに叫ばせたら、あたたたたーっ！ だつて」

チヨコ「ケンシロウかよ！」

ミコ「出てきたのは耕造の日記ですね。沢木の子供たちへの想いを綴っています」

（捜査本部へと戻ってきた）

チヨコ「さて、これで最後だ。……ヤスの服を脱がせ！」

カイコ「BL展開っ！？ わくわく！」

ミコ「ちよっ、カイコ姉様、ヨダレが……」

チヨコ「しかも、ヤスって間の抜けた顔だぜ？」

カイコ「そのあたりは脳内補完するものなのよ！」

チヨコ「ダメダメだな、この姉……」

ミコ「ダメダメです……」

カイコ「ふんっ、私のささやかな趣味をとにかく言わないで」

ミコ「ささやか、でしょうか……？」

チヨコ「ま……まあ、ともかく脱がせ！」

カイコ「抵抗されても強引に剥ぎ取る感じね！」

ミコ「確かにコマンド3回必要ですが……カイコ姉様は目的が違う気がします」

カイコ「ゲームさえ進めば、細かいことは気にしないでいいのよ」

チヨコ「というわけで、クリアだ！」

ミコ「最後はパトカーのサイレンの音が、近づいたてきたあとに遠のいていく感じで、

終わりになるんですね」

カイコ「しっかりとドブラー効果を再現してるのね」

チヨコ「しょぼめの音だけだな！」

ミコ「それじゃあ、カイコ姉様、今日の夕飯を……」

カイコ「うゝん、遅くなっちゃったし、カツ丼でも取ることにしましょうか」

チヨコ「おおっ！ いいな！」

（そして電話で注文、カツ丼が到着）

チヨコ「うん、美味しい！」

カイコ「ほんと、美味しいわね」

ミコ「はい、最高です！」

カイコ「……ところで」

チヨコ「んっ？」

カイコ「私のくーたんの腕がちぎれてたんだけど、誰か知らない？」

ミコ「くーたんって、カイコ姉様のお気に入り、熊のぬいぐるみですよ」

チヨコ「う……」

カイコ「そうなのよ。腕の部分がちぎれて、中の綿が飛び出してたのね。」

誰のせいなのかしらね？ チヨコ？ なにか知らない？」

チヨコ「うぐぐぐ……」

カイコ「うぐぐぐ？」

チヨコ「オ……オレがやりました……。ごめんなさい……」

カイコ「ふふっ、カツ井の自白能力も最高みたいね」

チヨコ「いつもの恨みとばかりに腕を持ってぐるぐる回したら、ちぎれちゃって……」

他にもキックやパンチを何度もお見舞いしてました……！

カイコ「ちょ……！？ 大切なくーたんに、なんてことしてるのよ！」

ミコ「余分な自白まで引き出すとは、カツ井はやっぱり最高です！」

チヨコ「すまない、カイコ姉！　あとでオレが修繕しておくから、許してくれ！」

カイコ「い……いいわよ、自分でやるから。チヨコじゃ、余計ひどくなりそうだし」

ミコ「これにて一件落着です」

ポートピア連続殺人事件か。

こういうアドベンチャーゲーム系はあまり遊んでなかったが……。

今どきだと、サイトで調べれば簡単にクリアできるみたいだな。

まさか10分程度でクリア可能だとは、想像もしていなかったわけだが。

どうでもいいが、カイコはぬいぐるみが好きなようだな。

女の子らしいとは思うが、少々似合わないような気も……。

なんて言ったら気を悪くするだろうか。

ただ、あのくーたんという熊のぬいぐるみは、初めて買ってあげたやつだったな。

今でも大切にしてくれているというのは嬉しいところだ。

チヨコにも少しは見習ってほしいのだが……。

【ゲーム解説】

「ポートピア連続殺人事件」

対応ハード：ファミコン 発売元：エニックス 発売日：1985
年11月29日

堀井雄二がデザインしたアドベンチャーゲーム。
もとはパソコンゲームで、多くのパソコンの機種に移植されたのち、
ファミコンに移植された。

パソコン版では、キーボードからコマンド入力するタイプだったが、
ファミコンではコマンド選択式に変更された。

『北海道連鎖殺人 オホーツクに消ゆ』、『軽井沢誘拐案内』と合
わせて「堀井ミステリー三部作」とも呼ばれる。

なお、虫眼鏡やトンカチのカーソルを移動させて調べたり叩いたり
するシーンや、3Dの地下迷宮のは、ファミコン版で追加された要
素。

第7話 スパルタンX

カイコ「ただいま」

チヨコ「おつ、やっと帰ってきたな！」

ミコ「お帰りなさいませ、カイコ姉様」

カイコ「ごめんなさいね」。委員会で遅くなっちゃった」

チヨコ「委員会か。なにやってんだ？」

カイコ「図書委員よ。ふふつ、私にぴったりでしょ？ 文学少女って感じで」

ミコ「文学……少女……ですか……？」

チヨコ「主に読むのはB・Lマンガのくせに、なにを言っかな、この姉は」

カイコ「なによ。それでも学校では猫かぶってるって言われてるんだから」

チヨコ「なるほど。学校では猫かぶってるってわけだ」

カイコ「クラスメイトは本質を見抜いてくれてるのよ」

ミコ「カイコ姉様は、図書委員に立候補したんですか？」

カイコ「う……。推薦よ……。誰もやりたい人がいなくて……」

チヨコ「つまり、似合ってるからって言って、押しつけられたんだな」

ミコ「面倒なことなんて、基本やりたくないものですからね」

カイコ「私は立候補したっていいくらいに思ってたから、べつに嫌だなんて思っていないわよ？」

チヨコ「だがそのせいで、ゲームする時間が減った！」

カイコ「た……。確かに、それはそうだけど……」

ミコ「まあ、いいです。今日のゲームを始めましょう」

チヨコ「そうだな！」

カイコ「……でも考えてみたら、今日の担当はチヨコじゃないの。私抜きで始めててもよかったのに……」

ミコ「3人で一緒に楽しまなくては、意味がありません」

チヨコ「そうだぜ！ 父さんもそれを望んでるはずだ！」

カイコ「ふたりとも……」

ミコ「というか、今回のゲーム、まだ決めてなかったですし」

カイコ「あら？ そういえばそうね。すっかり忘れてたわ」

チヨコ「だったら、さくつと決めてくれ！」

カイコ「そうね。あまり時間もなさそうだし、これにしましょうか」

ミコ「スパルタンXですか」

チヨコ「おっ、待望の格闘系だな！」

カイコ「格闘っていつても、チヨコの好きな対戦格闘ものじゃないけどね。」

同じ頃のだと、イーアルカンフーが対戦格闘系になるとは思っけど」

ミコ「あまりネタにもならなそうですしね」

チヨコ「ふむ。ま、なんでもいいや！とにかく、始めるぜ！」

カイコ「コンティニューはできないけど、長くはないから、頑張つてね」

チヨコ「スパルタンXって、ジャッキー・チェン主演の映画だったよな！

見たことはないけど！」

カイコ「そうね。ユン・ピョウやサモ・ハン・キンポーも出てる、カンフーアクション映画ね」

ミコ「ゲームは、オリジナルストーリーのようですが」

カイコ「主人公はジャッキーが演じていたトーマスだけど、他の2人は出てこないし、

シルビアをさらったミスターXさえ、映画にはいなかったみたいだわ」

チヨコ「そんなでいいのかよ」

カイコ「当時は細かいことは気にしない感じだったのかしらね」

ミコ「あまり細かい気もしますが……」

カイコ「そんなことより、ゲームが始まってるわよ」

チヨコ「わかってるって。ザコ敵を倒しながら、左に進んでいけばいいんだな」

ミコ「パンチとキックで戦うんですね」

カイコ「あとは、上でジャンプ、下でしゃがむ。操作としてはそれだけね」

チヨコ「なんともシンプルだ！」

ミコ「攻撃時の、アチヨーって声が、なんかいい感じです」

カイコ「ちなみにこのザコ敵は、つかみ男よ」

ミコ「近寄ってくると腕を上げて抱きついてくるんですね」

カイコ「つかみかかってくるってのが、正しいはずだけど」

チヨコ「でも、なんか嫌だな。主人公が女じゃなくてよかったぜ」

ミコ「抱きつかれると、ライフがぐんぐん減っていきますね」

チヨコ「そうだな。おつ、死んだ！　びよん、って効果音がマヌケっぽいな！」

カイコ「遊んでないで、先に進みなさいな」

チヨコ「んじゃ、とりあえず一旦リセットで……」

カイコ「今度は真面目にやりなさいよ」

チヨコ「わかってるって。オレにかかれば楽勝だぜ！」

ミコ「ナイフ投げがでてきましたよ！」

カイコ「名前だけ出せば説明のいらないキャラで助かるわね」

チヨコ「ナイフは上投げだったらしやがんで、下投げだったらジャンプでかわせるな」

近寄ってしやがみパンチ連打！」

ミコ「さくつと退治ですね」

チヨコ「へっ、ざっとこんなもんさ！」

カイコ「なんてゆっくりしないで進みなさいな」

ミコ「進まないと、敵は無限に出てくるみたいですね」

チヨコ「だったらさくさく進むだけさ！」

カイコ「そして出ました、棒術使い」

ミコ「棒って……術、なのでしょうか……？」

チヨコ「知るか！　ともかく、棒を使わせなければいいだけだろ！
一気に近寄ってしゃがみパンチ連打！　おらおらおらおら
！」

カイコ「あら、簡単」

ミコ「さくつと倒せましたね、ボスなのに」

チヨコ「へへっ、どんなもんだい！」

カイコ「なんて余裕をかましてると、ザコ敵が出てきてやられるわ
よう？」

チヨコ「くっ、ボスを倒したからって安心していられないってわけ
か」

ミコ「まあ、画面の左端まで行けばいいだけですけどね」

チヨコ「おつ、階段があるぞ」

カイコ「無事1面クリアね」

ミコ「2面は1面とは逆で、右側に向かって進んでいくんですね」

チヨコ「ま、大して変わらないな。さあ、出てこい、つかみ男！」

カイコ「残念ながら、前半はザコ敵との戦いじゃないのよね」

ミコ「壺が落ちてきましたよ」

チヨコ「うおつ、ヘビになった！　しゃがみキック！　……う、倒せない！」

カイコ「ヘビになったら、もう倒せないみたいね」

チヨコ「今度は丸いのが空中に浮いてる……？」

ミコ「破裂すると弾を飛ばしてきますよ！」

チヨコ「今度は丸っこいのが地面に落ちて……龍になるのかよ！」

カイコ「炎を吐いてきたわね」

ミコ「以上3種類の仕掛けを避けつつ進むみたいです」

カイコ「壺とか丸い玉とかは倒せるし、龍も倒せるみたいだね」

チヨコ「ふうむ。とりあえず、へびはジャンプして避けて、空中の玉はジャンプキック、

龍は倒せたら倒して、そうでなければ少し離れて回避、つてところか」

ミコ「さくさく進んでしまうのがよさそうですね」

カイコ「途中からはお待ちかね、つかみ男の登場よ」

チヨコ「べつに待ってないけどな。来るな変態！」

ミコ「さて、ボスですね」

カイコ「ここのボスは、ブーメラン使いよ」

チヨコ「やっぱりそのままだ。ナイフ投げのナイフが戻ってくるよ
うなもんだろ！」

近づいて、しゃがみパンチ連打！ あたたたたたた！」

ミコ「チヨコ姉様、ケンシロウになってます」

カイコ「ともかく、2面もさくつとクリアね」

チヨコ「おやつ？ シルビアがいる……？」

ミコ「椅子に縛りつけられたシルビアがいて、笑い声が響いてきましたよ。」

「ワッハッハッハって、これはミスターXの声ってことでしょ
うか」

カイコ「トーマス、早く助けにきて〜！　っていう演出って感じが
しらね〜」

チヨコ「トーマスのすぐ目の前にシルビアがいるように見えるんだ
けど……」

ミコ「ワープしたんですかね？」

カイコ「きつとトーマスの妄想なのよ〜」

チヨコ「なるほど、思考がワープしたのか」

ミコ「妄想癖があるなんて、ちょっと微妙な主人公ですね」

チヨコ「3面だな！」

カイコ「ここは新たなザコ敵が出てくるわよ〜」

チヨコ「つかみ男、ナイフ投げときたから、今度はムチ使いとかか
？」

ミコ「残念、トムトムです」

チヨコ「と……とむとむ？」

カイコ「小さな敵ね。しゃがまないと、攻撃を当てられないわ」

チヨコ「なぜ、トムトム……？」

これまでもずっと、わかりやすい名前ばかりだったのに…

…」

ミコ「さあ、どうしてでしょう？」

カイコ「ま、小っちゃいことを気にしてはいけないわ」

チヨコ「実際、小っちゃい敵だしな！」

ミコ「……………」

チヨコ「と、とにかく！ ボスだ！」

カイコ「怪力男ね」

ミコ「なぜにランニング姿の黒人さん……。ビリーでしょうか？」

カイコ「ブートキャンプなんてしないわよ」

チヨコ「まあ、パンチとキックしかないわけだし、飛び込む以外に手はない！

近寄ってしゃがみパンチ連打……………！」

ミコ「これまた、あっさりでした」

カイコ「強力なキック攻撃もしてくるみたいだけど、使わせる隙もなく倒したわね」

チヨコ「さてさて、4面だ！」

カイコ「また仕掛けがあるわ。仕掛けってというか、毒蛾の巣だけど」

ミコ「毒蛾ですか……」

チヨコ「蛾なんかに負けてられるか！」

カイコ「蛾は倒せるけど、もちろん無限に出てくるから、さっさと進むべきね」

ミコ「蛾の出てくる穴は、全部で4つですね」

チヨコ「結構少ないな！ 楽勝だぜ！」

カイコ「後半は普通にザコ敵が出てくるわ」

チヨコ「ちよろいちよろい！」

ミコ「チヨコ姉様が調子に乗ってます」

カイコ「ふふっ、でも、このボスはひと筋縄ではいかないわよね？」

チヨコ「ほほう。出てきたな。……じいさんか？」

ミコ「妖術使いですね」

チヨコ「ま、どんな敵だって楽勝だぜ！ 近寄って……むっ？」

カイコ「煙になって消えたわね」

チヨコ「ワープかよ！」

ミコ「壺とか龍の玉とかまで投げつけてきますよ」

チヨコ「ふんっ、近寄ればこっちのものだ！パンチっ！……うげっ！？」

ミコ「く……首がもげましたよ！？」

カイコ「ふふっ、首はもげちゃうから、ダメージを与えられないのよね」。

胴体に当てないとダメなのよ」

チヨコ「くっ、やられた……無念……！」

（再び毒蛾地帯を抜け、妖術使いとの戦いへ）

チヨコ「今度こそ！ 上手く間合いを詰めて、しゃがみパンチ連打！」

ミコ「あつ、やりましたね！」

カイコ「パターンはランダムでしょうから、短期決戦が簡単に決まることもあるのね」

チヨコ「ふう、強い敵だった」

ミコ「またシルビアと笑い声が」

チヨコ「トーマスの妄想シーンだな！」

カイコ「完全に妄想ってことになっちゃってるわね」

ミコ「さて、5面……最終面です」

カイコ「相変わらずのザコ敵が出てくるわよ」

チヨコ「もう最後の面なのか。ほんと、楽勝だな！

……むっ、小っこい敵、回転ジャンプしてきたぞ！」

ミコ「トムトムですってば。回転攻撃は、ジャンプするだけで倒せますよ」

チヨコ「パンチやキックを出すまでもなく、ジャンプの体当たりでいいのか」

カイコ「それに、左右からナイフ投げが出てくるわよ」

チヨコ「なるほど、これは結構大変だな！」

ミコ「大変だ、などと言いながら、さくつと倒してますね」

チヨコ「オレは強すぎるからな！」

カイコ「それではお待ちかねのラスボスよ」

ミコ「ミスターXですね」

チヨコ「ふっふっふ、オレの敵じゃない！ 間合いを詰めてしゃがみパンチ！

……おや？ 負けた……？」

カイコ「ふふっ。さすがはラスボスね」

チヨコ「へへっ、やるじゃねえか！ 次こそは勝つてやる！」

（というわけで、再度ミスターXとの戦い）

カイコ「ふふっ、チヨコ、ここはしゃがみキック連打よ」

チヨコ「む？　こうか？」

ミコ「……あつ、ミスターXが……」

チヨコ「うお……、しゃがみキックに自ら当たりに来てダメージを受けてる……」

ミコ「そして、それだけで倒してしまいました」

カイコ「以上、ラスボス戦終わりよ」

チヨコ「な……なんだか納得のいかないラスボスだ！　弱すぎる！」

カイコ「というわけで、クリアね。無事シルビアを助けたわ」

ミコ「確かに、あまり時間はかかりませんでしたね」

チヨコ「不完全燃焼な終わり方だったけどな……」

カイコ「そんなチヨコに朗報！」

チヨコ「えっ……？　嫌な予感……」

カイコ「この頃のゲームだから、もちろん2周目以降もあるわ」

チヨコ「ふむ。それなら予想済み……」

カイコ「でね、アルファベットのXは24番目、すなわち24周目までクリアすると、

シルビアが襲いかかってくるっていう衝撃の展開があるのよ〜！」

チヨコ「ちょ……！？　そこまでやれていうのか……？　さすがに24周なんて……」

ミコ「夕飯を食べる前に、夜が明けてしまいますね」

カイコ「しかも、コンティニューできないから、失敗したら最初からよ〜」

チヨコ「そ……それは勘弁してくれ〜！」

カイコ「ふふっ、冗談よ。だいたい、シルビアが襲いかかってくるってこと自体、

単なるデマだもの。実際には24周しても変わらないわ〜」

ミコ「マンガで描かれたネタだったって話ですね」

カイコ「でも、実際に24周クリアを検証した動画なんかもあるみたいよ〜」

チヨコ「す……すごいな……」

ミコ「2周目以降は、ミスターXもしゃがみキックだけじゃ対処できないようですね」

チヨコ「ま、とにかくクリアってことで、今日は終了でいいよな？」

カイコ「そうね」

ミコ「ミコは、おなかぺこぺこです」

カイコ「ふふっ。今日の夕飯は、スパグラタンよ」。

朝のうちに用意してあったから、レンジで温めるだけだ
どね」

チヨコ「おっ、美味そうだ！」

ミコ「……スパルタンXだから、スパグラタン、ですか……？」

カイコ「ふふっ、当たり前！」

ミコ「ですがカイコ姉様、今回のゲーム、決めていなかったはずで
は……？」

カイコ「夕飯が決まってたから、このゲームにしたのよ」

ミコ「なるほど……」

チヨコ「ま、なんでもいいや！ 早く用意してくれ！」

カイコ「はいはい。ちゃんと手を洗ってきてね？」

（カイコはそう言い残して、台所へ向かう）

チヨコ「手洗いか。面倒だな。べつにいいじゃんかよ、なあ？」

ミコ「ですが、言いつけを守らないと、カイコ姉様が襲いかかってきますよ？」

チヨコ「くっ、シルビアですら襲いかかってこないのに！」

ミコ「我が家のラスボスですから、カイコ姉様は」

チヨコ「しかも、最強のな……。仕方がない、洗面所に行くか」

ミコ「ミコも一緒に行きます」

スパルタンXは、当時随分と流行った気がする。
カンフー映画とかが流行っていた時期でもあったし、時代に合っていたのだろうか。

しかし、カイコが最強のラスボスか……。確かにそんなイメージかもしれないな。

妹たち2人にとっては、姉は絶対に越えられない存在ということか。
それにしても、一緒に洗面所まで行くとか、チヨコとミコも仲がいいな。

昔はよくケンカもしていたように思うが、大人になったものだ。

カイコがいいお姉さんとしての役割をしっかりとこなしているという理由もあるだろうが。

……この家には、もともと俺の存在なんて、必要なかったのかもしれないな……。

【ゲーム解説】

「スパルタンX」

対応ハード：ファミコン 発売元：任天堂 発売日：1985年6月21日

1984年に稼動したアーケード版（アイレムが開発・販売）を移植したもの。

音声合成を使った掛け声や笑い声が使用されているのが、ヒットにつながった要因となった模様。

アーケード版と比べて、難易度は下がっている。142万本売れた。

なお24周クリアのデマは、コロコロコミックに連載されていた「ファミコンロッキー」で描かれた内容。

第8話 アタックアニマル学園

カイコ「ただいま。また遅れちゃった」

ミコ「お帰りなさいませ、カイコ姉様」

チヨコ「カイコ姉、また委員会だったのか？」

カイコ「いえ、今日はちょっと、呼び出しが……」

チヨコ「なにやらかしたんだよ、カイコ姉！」

ミコ「待つてください、チヨコ姉様。呼び出しといっても、先生からは限りません」

チヨコ「なるほど」

ミコ「中庭の隅に呼び出されて、僕とつき合ってください、と……」

チヨコ「カイコ姉じゃ、それはないな」

カイコ「ちょ……ちょっと、どういう意味よ？ ……確かに違うけど……」

チヨコ「とすると……果たし状ってやつか！？ 校舎裏でタイマンだな！？」

ミコ「おおっ！ それも燃える展開です！」

カイコ「私はスケ番じゃないわよ」

チヨコ「スケ番って死語じゃないか？ やっぱカイコ姉、年齢査証してるだろ？」

カイコ「してないってば。普通に先生に呼び出されただけよ」

ミコ「普通は呼び出されません、カイコ姉様」

カイコ「う……」

チヨコ「それで、結局なにをやらかしたんだ？」

カイコ「やらかしたわけじゃないわ。掃除をちゃんとやれって叱られただけよ」

ミコ「……やらかしてるじゃないですか。掃除をサボっていたんですよね？」

カイコ「う、私はちゃんとやってたのよ？ でも他の人たちが遊んで、

私が班長だからってことで、呼び出されちゃったの」

チヨコ「なるほどな。しっかり班員をまとめろ、ってことか」

ミコ「それにしても、カイコ姉様に逆らうだなんて、命知らずな人たちですね」

カイコ「学校ではおしとやかな女の子なのよ」

チヨコ「やっぱ、猫かぶってるじゃん」

カイコ「なによぉ〜？」

ミコ「今日もあまりゲームをする時間がないですね」

チヨコ「さくつとクリアできそうなのをやればいいさ！」

カイコ「ごめんね〜」

チヨコ「謝ることじゃないだろ。あ、ところでさ、RPGとかシミュレーションとか、

時間のかかりそうなゲームとかもあるじゃん？

そういうのって、どうするんだ？ 大抵、カイコ姉の担当になると思っけど」

カイコ「う〜ん、そうね〜。みんなで一緒に楽しむのが基本だものねえ〜。

とりあえず、序盤だけ遊ぶって感じでもいいけど……」

チヨコ「ま、実際やるときになってから考えればいいか」

ミコ「そうですね。それで、今日はなにをしましょうか？ ミコの担当でしたよね？」

チヨコ「ふっふっふ、今回はコレだ！」

ミコ「アタックアニマル学園、ですか？」

動物がたくさんでてきて可愛いゲームっぽいですね」

カイコ「ふふっ。難易度は高いらしいわよ」

ミコ「高難易度ということは、シューティング系ですね？

ミコにかかれば、どんな弾幕も怖くないです」

チヨコ「まあ、3Dシューティングだけだな」

ミコ「3D系ですか。ちょっと苦手ですが、問題ありません！」

カイコ「ふふっ、頑張ってね」

チヨコ「オレのためにな！」

ミコ「???」

チヨコ「んじゃ、ゲームスタート！」

ミコ「……おや、主人公、女の子なんですネ」

カイコ「主人公はスケ番よ」

チヨコ「カイコ姉だな！」

カイコ「違う！ ノックって名前みたいよ」。

誘拐された親友を救うため、アニマル学園連合に立ち向かう、

っていうストーリーになってるわね」

チヨコ「なんだよ、アニマル学園連合って……」

カイコ「まあ、名前のとおりでしょ？ 敵は動物とかが多いみたいね」

ミコ「動物じゃないのも、いろいろと出てくるみたいですが……」

チヨコ「どうでもいいけど、こういうゲーム、なんか見たことある気がするんだが」

カイコ「ふふっ、スペースハリアーね」

チヨコ「そうそう、それだ！」

ミコ「ミコもなんとなくわかります。遊んだことはないですが」

チヨコ「完全にパクリ……？」

カイコ「ゲームシステム部分はほぼ一緒よね」

ミコ「まあ、システムをマネしたらダメってことになったら、
なにも作れなくなってしまうすよね」

チヨコ「それもそうか」

カイコ「流行り物をマネするのは、基本だものね」

チヨコ「ちなみにこのゲーム、3Dシステム対応だ！」

ミコ「3Dシステム……ですか？」

カイコ「専用の3Dメガネをかけると、立体的に見えるモードがあるのよ」

ミコ「この頃の3Dっていうと、赤青メガネとかですか？」

チヨコ「ディスクシステムで発売された、とびだせ大作戦ってゲームだと、

そういうメガネが付属してたみたいだけどな。でもこれは違う」

カイコ「セレクトボタンを押してみなさいな」

ミコ「ふむ。ぽちつ。……ブレた映像になりましたね。ですが、赤青じゃありません」

カイコ「左右の映像を交互に表示して、メガネのほうでも左右を交互にシャットアウト

する方式で、左右の目に別々の映像を映すって感じになってるのよ」

ミコ「そ……それって、今ある3Dテレビと同じなんじゃ……？」

チヨコ「そのとおりだ！ 実はこんなに前から実現していた技術だったんだな！」

カイコ「もっとも、ハード性能の問題で左右の切り替え速度が遅いから、

とっても目が疲れるっていう問題点があったみたいだけどね〜」

チヨコ「時代を先取りしすぎたんだな！」

カイコ「実際、対応ソフトもあまり出なかったみたいよ〜。

それに、メガネだけでソフト1本分くらいの値段だったらしいし〜」

ミコ「バーチャルボーイよりも前に、そんな失敗もあったんですね、任天堂」

カイコ「その黒歴史には、触れないでおいてあげましょう〜」

チヨコ「ま、3Dメガネはないみたいだから、普通のモードに戻そうぜ！」

カイコ「そのままだと、単なるブレた画面なだけなものね〜」

ミコ「1面のボスまで来ました」

チヨコ「コアラがガ克蘭着てるぞ！」

カイコ「さすが、アニマル学園ね〜」

ミコ「どうでもいいですけど、すごく目つきの悪いコアラです」

チョコ「ちなみにボスは倒せない。周囲を飛んでるザコを全滅させたらクリアだ！」

ミコ「ボス、意味ないじゃないですか……」

カイコ「弾はたくさん撃ってくるわよ」

チョコ「取り巻きがいなくなったら、覚えてるよ！　って言うて逃げるってことか！」

ミコ「倒せないボスなんて、納得いきません……」

カイコ「言いながら、倒したわね」

チョコ「ザコが全滅したら、ボスも爆発したな！」

ミコ「ほんとに、納得がいきません……」

（それはともかく、2面スタート）

ミコ「背景の色が変わりましたね」

カイコ「砂漠とかのイメージかしら？」

チョコ「いや、もっと別のところに注目しようぜ！」

カイコ「え……？」

ミコ「あ……主人公のスカートが短くなってませんか？」

カイコ「あら、ほんと」

チヨコ「うむ、そのとおり！　かなり際どいところまで見えてるな！」

カイコ「……チヨコ、これが楽しみだったわけね……」

ミコ「脱衣シューティングですか？　もしかして18禁……」

チヨコ「ファミコンにそんなのないって！」

カイコ「それに、ファミコンの絵で、しかも小さめのドット絵じゃあ……」

チヨコ「そこは妄想力でカバーするのさ！」

ミコ「チヨコ姉様といいカイコ姉様といい、妄想パワーが凄まじすぎですね」

カイコ「ちょっと、私までこんな変態と一緒にしないでよ」

チヨコ「さらっと変態って言いやがった！」

ミコ「同じ穴のムジナです」

カイコ「……ムジナは出てこないのかしら」

チヨコ「出てきたとしても、このゲームじゃ可愛くなさそうだな」

ミコ「そして出てきた敵は、ガイコツです」

カイコ「アニマルじゃない……」

チヨコ「動物の骨なんだろう！ 明らかに人間っぽいけど……」

ミコ「サルとかチンパンジーとかだと考えておきましょう」

カイコ「そうだとすると、骨が襲いかかってくるのは恐ろしいわ……」

（そんなこんなで2面もクリア）

チヨコ「さて、3面だ！」

ミコ「また、変わりましたね、主人公の服装が」

カイコ「体操服ね」

チヨコ「下はブルマだ！」

カイコ「今ではブルマは穿かないものね。時代を感じるわ」

ミコ「どうしてもいいですが、どうしても体操服に着替えたのでしょうか？」

チヨコ「2面までの戦いで暑くなったんだろ。汗もかくだろうしな！」

カイコ「2面でスカートが短くなったのも、暑かったからだっただのね」

チヨコ「ちなみに3面は、火山ステージだ！」

ミコ「ちょ……火山って……！ アニマル学園連合じゃなかったんですか？」

チヨコ「火山地帯にある学校って設定なんだろ！」

カイコ「そんな場所の学校になんて、通いたくないわね」

ミコ「ですが、確かに火山地帯なら、暑いのも領けますね」

（そして3面もクリア）

チヨコ「で、4面だな！」

ミコ「今度は、スクール水着ですか……」

カイコ「どうして水着に……」

チヨコ「ここは、水中ステージだからな！」

ミコ「水中なんですね。たしかに泳いでますが」

カイコ「いや、それを言ったら、3面までは空を飛んでたわよ？」

チヨコ「……そこはスルーで！」

カイコ「理由が思いつかなかったわね……？」

ミコ「ところで、ここが水中だとして、どうやって息をしているんでしょう？」

チヨコ「ずっと息を止めてるんだよ！ スケ番だから我慢強いんだ！」

カイコ「凄まじく長く息を止めていられる人なのね」

チヨコ「世界記録保持者だ！ ギネスにも載ってる！」

カイコ「勝手な設定を追加しないの」

ミコ「足は、ヒレみたいになってますね」

チヨコ「超高速で泳げる足ヒレを装備してるんだぜ！」

カイコ「また勝手な設定を……」

（で、4面もクリア）

カイコ「次は5面ね〜」

ミコ「これは……なんでしょう?」

チヨコ「よくわからんコスプレだ!」

カイコ「コスプレって言っちゃった」

ミコ「一応、なにかの制服なんだろうかね〜?」

チヨコ「知らないが、ステージクリア後に生着替えしてると考えると、萌えるよな!」

カイコ「同意を求めないで〜」

ミコ「どうでもいいですが、この面の背景は暗いですね」

チヨコ「暗闇面だからな!」

カイコ「どという設定なのかしらね〜」

チヨコ「細かいことは気にするな!」

チヨコ「よし、6面、すなわち最終面だ！」

ミコ「結構短いですね」

カイコ「……そして、別の短いものを発見しちゃったわ……」

ミコ「見たところ、2面と同じでセーラー服姿ですが……おや？」

チヨコ「そう。スカートがさらに短くなってるんだぜ！」

カイコ「っていうか、見えてる……わよね？」

チヨコ「うむ！ 完全にパンチラだ！ いや、いい眺めですな
！　じゅるり」

ミコ「ドットの白いのが見えてるだけですが……」

チヨコ「そこはもちろん、妄想力だ！」

カイコ「はいはい。もうツツコミは入れないわよ」

ミコ「この面は、雲が見えてますね」

チヨコ「空中ステージだからな！」

カイコ「え？　地面、あるけど……」

チヨコ「それは地面じゃないんだ！　見えてるけど、ほんとは見えてないんだ！」

ミコ「とにかく、さくさく進めますよ」

カイコ「難しいかと思ったら、そうでもないみたいね」

ミコ「ミコにかければ、ちょちょいのちょいです」

チヨコ「きっとカイコ姉だとトロいから、ボコボコにされると思うぜ！」

カイコ「う、確かにそうかも……」

チヨコ「そして哀れスケ番カイコは敵に捕まり、あんなことやこんなことを……」

カイコ「ちよつと、変な想像しないの！　っていうか、私はスケ番じゃない〜！」

ミコ「まあまあ。あつ、どうやらラスボスのようです」

チヨコ「ラスボス、ヤマタノオロチだな！」

ミコ「頭が本っしかないですが……」

チヨコ「6本の頭は散歩中だ！」

カイコ「頭だけで出かけることができるんだ……」

チヨコ「ちなみに攻略法は、今までのボスと変わらない！」

ミコ「周りのザコを倒すだけです」

カイコ「ラスボスまで、それなのね」

（というわけで、ラスボスも撃破）

ミコ「倒しました」

カイコ「あつ、女の子が倒れてるわ」

チヨコ「親友だ！ 名前は無い！」

ミコ「名前くらいつけてあげればよかったのに……」

チヨコ「親友に駆け寄る主人公。そして――」

ミコ「倒れてる親友を心配して、前かがみになって声をかけてる感じですかね」

カイコ「だけど、スカートが短いから……」

チヨコ「うむ！ もちろん、パンチラだ！ 今度は2ドットある！」

ミコ「2倍に増えましたね」

カイコ「たった2ドット……」

チヨコ「されど2ドットだ！　じゅるっ」

カイコ「はぁ……。どうでもいいけど、チヨコだって女の子なのに、女の子のパンツを見て嬉しいの？」

チヨコ「なんか、いいじゃんか！」

ミコ「いいんですか……」

カイコ「……チヨコ、もしかして、以前撮った私のパンチラ写真も、そういう目で見てたりするの？」（若干引き気味）

チヨコ「いや？　カイコ姉のじゃ萌えないしな」

ミコ「1ドットに負けましたね、カイコ姉様」

カイコ「べつにいいんだけど、なんだか納得がいかない気もするわ……」

チヨコ「画面はエンディングになってるな！

親友の肩を抱きながら、画面に向かって銃を撃つ。いいシンじゃないか！」

カイコ「どうして銃を撃ってるのよ……」

ミコ「撃った瞬間、主人公と親友が目をつぶってるのが、ちょっと細かいですね」

チヨコ「うむ！　それにしても、今日は堪能した！」

カイコ「なんだか、実際にゲームをしていたミコよりも満足そうね」

ミコ「それで、今日の夕飯はなんでしょう？」

カイコ「それはもちろん、食パン2枚で……」

チヨコ「パン2（ツ）かよ！ そんな小学生みたいなダジャレなんて……」

ミコ「それに、夕飯のメニューじゃないです」

カイコ「ごめんなさいね」。

今日は遅くなると思ってなかったから、なにも用意してなかったのよ」

チヨコ「む……」

カイコ「とろけるチーズがあるから、コーンとかハムとか乗せて焼きましようか」

ミコ「ミコはとろけるチーズ大好きです！」

チヨコ「朝食みたいだけど、ま、いいか。今日は堪能したし！」

カイコ「そればかりね。やっぱりチヨコは、変態だわ」

チヨコ「カイコ姉も大概だけだな。こんなBL本読んでるし」

カイコ「ちよっ！？勝手に人の部屋のものを持ってこないで！」

（チヨコとカイコの、取っ組み合いのケンカが始まる）

ミコ「おふたりとも、いつもどおりです。そんな姉様方が、ミコは大好きです」

カイコ・チヨコ「……ミコも変わってるわよね〜（よな〜）」

ミコ「ど……どうしてですかっ!?!」

今日のゲームは、アタックアニマル学園……か。
どうしてこんなのを買ったんだっけな……。
さすがにソフト1本分の値段という、3Dメガネは持っていなかったが。

それにしても、主人公はスケ番だったのか。
スケ番といえば、スケ番刑事^{デカ}なんかも流行ったが……って、全然関係ないな。

チヨコはカイコをスケ番呼ばわりしていたが、そんな雰囲気でもないだろうに。

もちろん、家では長女としての役割を果たしているから、妹たちからしてみれば怖い存在なのだろうが。

足もとまであるくらいの長いスカートにマスクをして、釘バットやらチェーンやらを持っているカイコの姿は、ちよつと見てみたい気もするな。

……イメージが古すぎるだろうか……。

【ゲーム解説】

「アタックアニマル学園」

対応ハード：ファミコン 発売元：ポニーキャニオン 発売日：1987年12月26日

ほぼ、セガの『スペースハリアー』のシステムそのままといった感じの3Dシューティングゲーム。

主人公がスケ番のノックで、ステージごとに変わるのが特徴的。ファミコン3Dシステムに対応していて、専用のメガネで立体視が可能。

本編では触れないが、お地蔵さんを取るとパワーアップする。スタート時、弾は画面上に2発までしか出ないが、最大4発まで出せるようになる。

お地蔵さん1つ取るごとに、3連射、スピードアップ、4連射、スピードアップ、1UPとなるらしい。

また、お地蔵さんを1UPまで取ると、ショットで障害物も破壊で
きるようになる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7085y/>

R G S ～レトロゲームシスターズ～

2011年12月16日19時50分発行